

IBM Campaign

バージョン9 リリース1

2013 年 10 月 25 日

アップグレード・ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、97ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Campaign バージョン 9、リリース 1、モディフィケーション 0 および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Campaign
Version 9 Release 1
October 25, 2013
Upgrade Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1998, 2013.

目次

第 1 章 アップグレードの概要	1
アップグレード・ロードマップ	1
インストーラーの機能	4
インストールのモード	5
サンプル応答ファイル	6
Campaign と eMessage の統合	6
Campaign と IBM EMM 製品の統合	8
IBM Campaign の資料のロードマップ	8
第 2 章 Campaign アップグレードの計画	11
前提条件	11
Campaign のバックアップ	13
構成設定のエクスポート	13
アップグレード・ログ	13
すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件	14
Oracle または DB2 の自動コミットの要件	14
ユーザー定義のグループ名および役割名の変更	15
Campaign アップグレード・ワークシート	15
Campaign アップグレード・シナリオ	15
第 3 章 Campaign のアップグレード	21
Campaign のアンデプロイとアップグレード	21
SQL アップグレード・スクリプト	22
acUpgradeTool	25
Campaign 9.x の環境変数の設定	25
acUpgradeTool の実行	26
第 4 章 eMessage のアップグレードに関する考慮事項	29
eMessage をアップグレードするための前提条件	29
eMessage のアップグレード	30
eMessage アップグレード中の E メール	31
第 5 章 配置前の Campaign の構成	33
手動での Campaign システム・テーブルの作成とデータ設定	33
eMessage システム・テーブルの作成とデータの設定を手動で行う	34
手動での Campaign の登録	35
手動での eMessage の登録	36
Campaign 始動スクリプトにおけるデータ・ソース変数の設定 (UNIX のみ)	37
データベース環境変数およびライブラリー環境変数	37
第 6 章 Campaign Web アプリケーションの配置	41
Web アプリケーションのセッション・タイムアウトの設定	41

WebSphere Application Server への Campaign の配置	41
WAR ファイルから WAS への Campaign の配置	41
EAR ファイルから WAS への Campaign の配置	43
WebLogic への IBM Campaign の配置	45
レポートを表示するように WebLogic を構成する (UNIX)	46
Campaign サーバーの始動	46
Campaign サーバーの直接始動	46
Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする方法	47
第 7 章 配置後の Campaign の構成	49
Campaign リスナーが稼働中であるかどうかの検査	49
Campaign システム・ユーザーをセットアップする	49
「構成」ページでデータ・ソース・プロパティを追加する	50
データ・ソース・テンプレートのインポート	51
データ・ソース・テンプレートの複製	52
Campaign 構成プロパティ	52
Campaign のテーブルをマップする	53
Campaign のインストールの検証	54
IBM EMM 製品との統合のためのプロパティの設定	54
第 8 章 Campaign での複数のパーティションの構成	55
パーティション・スーパーユーザー	56
複数のパーティションのセットアップ	56
パーティションのデータ・ソース・プロパティの構成	58
Campaign のシステム・ユーザーのセットアップ	59
複数のパーティションがある場合の IBM Cognos レポートの使用	60
パーティションへの役割、権限、およびグループの割り当て	60
第 9 章 eMessage での複数のパーティションの構成	63
eMessage のパーティション: 概要	63
eMessage に複数のパーティションを構成するためのロードマップ	64
eMessage の新しいパーティションを作成する	65
パーティションの eMessage システム・テーブルを準備する	67
eMessage システム・テーブルの作成とデータの設定を手動で行う	68
IBM EMM Hosted Services にアクセスするシステム・ユーザーの構成	69
新規パーティションに対応する Campaign で eMessage を使用可能にする	70

eMessage の受信者リスト・アップローダーの場所の指定	70
eMessage を構成した後のシステム・コンポーネントの再始動	71
eMessage パーティションの構成および接続をテストする	71

第 10 章 IBM Marketing Platform ユーティリティーおよび SQL スクリプト . . . 73

Marketing Platform ユーティリティー	75
alertConfigTool	75
configTool	75
datafilteringScriptTool	80
encryptPasswords	81
partitionTool	83

populateDb	85
restoreAccess	86
scheduler_console_client	88
eMessage レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) スクリプト	90
eMessage MKService_rct スクリプト	91

第 11 章 Campaign のアンインストール 93

IBM 技術サポートへの連絡 95

特記事項 97

商標	99
プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項	99

第 1 章 アップグレードの概要

Campaign のアップグレードは、Campaign をアップグレード、構成、配置するときに完了します。Campaign アップグレード・ガイドには、Campaign のアップグレード、構成、配置に関する詳細な情報が含まれています。

アップグレード・ロードマップ・セクションを使用して、Campaign アップグレード・ガイドの使用に関する幅広い理解を得てください。

アップグレード・ロードマップ

アップグレード・ロードマップを使用すると、Campaign のアップグレードに必要な情報が素早く見つかります。

以下の表を使用して、Campaign をアップグレードするために完了しておく必要があるタスクをスキャンすることができます。

表 1. Campaign アップグレード・ロードマップ

トピック	情報
『第 1 章 アップグレードの概要』	このトピックには、以下の情報が含まれています。 <ul style="list-style-type: none">• 4 ページの『インストーラーの機能』• 5 ページの『インストールのモード』• 6 ページの『Campaign と eMessage の統合』• 8 ページの『Campaign と IBM EMM 製品の統合』• 8 ページの『IBM Campaign の資料のロードマップ』
11 ページの『第 2 章 Campaign アップグレードの計画』	このトピックには、以下の情報が含まれています。 <ul style="list-style-type: none">• 11 ページの『前提条件』• 13 ページの『Campaign のバックアップ』• 13 ページの『構成設定のエクスポート』• 13 ページの『アップグレード・ログ』• 14 ページの『すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件』• 15 ページの『Campaign アップグレード・ワークシート』• 15 ページの『Campaign アップグレード・シナリオ』

表 1. Campaign アップグレード・ロードマップ (続き)

トピック	情報
21 ページの『第 3 章 Campaign のアップグレード』	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 21 ページの『Campaign のアンデプロイとアップグレード』 • 22 ページの『SQL アップグレード・スクリプト』 • 25 ページの『acUpgradeTool』
29 ページの『第 4 章 eMessage のアップグレードに関する考慮事項』	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 29 ページの『eMessage をアップグレードするための前提条件』 • 30 ページの『eMessage のアップグレード』
33 ページの『第 5 章 配置前の Campaign の構成』	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 33 ページの『手動での Campaign システム・テーブルの作成とデータ設定』 • 35 ページの『手動での Campaign の登録』 • 37 ページの『Campaign 始動スクリプトにおけるデータ・ソース変数の設定 (UNIX のみ)』
41 ページの『第 6 章 Campaign Web アプリケーションの配置』	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 41 ページの『Web アプリケーションのセッション・タイムアウトの設定』 • 41 ページの『WebSphere Application Server への Campaign の配置』 • 45 ページの『WebLogic への IBM Campaign の配置』 • 46 ページの『Campaign サーバーの始動』

表 1. Campaign アップグレード・ロードマップ (続き)

トピック	情報
<p>49 ページの『第 7 章 配置後の Campaign の構成』</p>	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 49 ページの『Campaign リスナーが稼働中であるかどうかの検査』. • 49 ページの『Campaign システム・ユーザーをセットアップする』 • 50 ページの『「構成」 ページでデータ・ソース・プロパティを追加する』 • 52 ページの『Campaign 構成プロパティ』 • 53 ページの『Campaign のテーブルをマップする』 • 54 ページの『Campaign のインストールの検証』 • 54 ページの『IBM EMM 製品との統合のためのプロパティの設定』
<p>55 ページの『第 8 章 Campaign での複数のパーティションの構成』</p>	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 56 ページの『パーティション・スーパーユーザー』 • 56 ページの『複数のパーティションのセットアップ』 • 60 ページの『パーティションへの役割、権限、およびグループの割り当て』

表 1. Campaign アップグレード・ロードマップ (続き)

トピック	情報
63 ページの『第 9 章 eMessage での複数のパーティションの構成』.	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 63 ページの『eMessage のパーティション: 概要』 • 64 ページの『eMessage に複数のパーティションを構成するためのロードマップ』 • 65 ページの『eMessage の新しいパーティションを作成する』 • 67 ページの『パーティションの eMessage システム・テーブルを準備する』 • 69 ページの『IBM EMM Hosted Services にアクセスするシステム・ユーザーの構成』 • 70 ページの『新規パーティションに対応する Campaign で eMessage を使用可能にする』 • 70 ページの『eMessage の受信者リスト・アップローダーの場所の指定』 • 71 ページの『eMessage を構成した後のシステム・コンポーネントの再始動』 • 71 ページの『eMessage パーティションの構成および接続をテストする』
73 ページの『第 10 章 IBM Marketing Platform ユーティリティおよび SQL スクリプト』	<p>このトピックには、以下の情報が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 75 ページの『Marketing Platform ユーティリティ』 • 90 ページの『eMessage レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) スクリプト』 • 91 ページの『eMessage MKService_rct スクリプト』
93 ページの『第 11 章 Campaign のアンインストール』	<p>このトピックでは、Campaignのアンインストール方法について説明します。</p>

インストーラーの機能

Campaign をインストールするとき、Campaign インストーラーとともに、IBM® EMM インストーラーを使用します。

IBM EMM スイート・インストーラーは、インストール・プロセス中に個々の製品インストーラーを開始します。

以下のガイドラインを使用して、Campaign をインストールします。

- IBM EMM インストーラーおよび Campaign インストーラーは、Campaign をインストールするサーバーの同じディレクトリーにあることを確認してください。

複数のバージョンの Campaign インストーラーが IBM EMM インストーラーのあるディレクトリーに存在するとき、IBM EMM インストーラーはインストーラー・ウィザードの「IBM EMM 製品 (IBM EMM Products)」画面で最新バージョンの Campaign を表示します。

- Campaign をインストールした直後に、パッチをインストールすることを予定している場合、パッチ・インストーラーが IBM EMM および Campaign インストーラーと同じディレクトリーにあることを確認してください。

デフォルトでは、IBM EMM は以下のディレクトリーのいずれかにインストールされます。

- /IBM/EMM (UNIX の場合)
- C:\IBM\EMM (Windows の場合)

IBM EMM 製品は、デフォルトでは *IBMEMM_Home* ディレクトリーのサブディレクトリーにインストールされます。例えば、Marketing Platform は *IBMEMM_Home/Platform* ディレクトリーにインストールされます。

ただし、インストール中にディレクトリーを変更することができます。

インストールのモード

IBM EMM スイート・インストーラーは、GUI モード、コンソール・モード、またはサイレント・モード (無人モードとも呼ぶ) のいずれかのモードで実行できます。Campaign をインストールする際は要件に見合ったモードを選択してください。

GUI モード

グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して Campaign をインストールするには、Windows の GUI モード、または UNIX の X Window System モードを使用します。

コンソール・モード

コマンド・ライン・ウィンドウを使用して Campaign をインストールするには、コンソール・モードを使用します。

注: コンソール・モードでインストーラー画面を正しく表示するには、UTF-8 文字エンコードをサポートするように端末ソフトウェアを構成してください。ANSI などその他の文字エンコードでは、テキストが正しくレンダリングされず、一部の情報が読み取れなくなります。

サイレント・モード

Campaign を複数回インストールするには、サイレント・モード (無人モード) を使用します。サイレント・モードは、インストールに応答ファイルを使用し、インストール・プロセスの間にユーザー入力を必要としません。

サンプル応答ファイル

Campaign のサイレント・インストールをセットアップするため、応答ファイルを作成する必要があります。応答ファイルを作成する際には、サンプル応答ファイルを利用できます。サンプル応答ファイルは、インストーラーの ResponseFiles 圧縮アーカイブに含まれています。

次の表には、サンプル応答ファイルに関する情報が示されています。

表2. サンプル応答ファイルの説明

サンプル応答ファイル	説明
installer.properties	IBM EMM マスター・インストーラーのサンプル応答ファイル。
installer_product initials and product version number.properties	Campaign マスター・インストーラーのサンプル応答ファイル。 例えば、installer_ucn.n.n.n.properties (ここで、n.n.n.n はバージョン番号) は、Campaign インストーラーの応答ファイルです。
installer_report pack initials, product initials, and version number.properties	レポート・パック・インストーラーのサンプル応答ファイル。 例えば、installer_urpc.properties は、Campaign レポート・パック・インストーラーの応答ファイルです。

Campaign と eMessage の統合

IBM Campaign を IBM eMessage と統合すると、eMessage を使用して、高度にパーソナライズした E メール・マーケティング・キャンペーンを行えます。eMessage は、IBM がホストしているリソースへのアクセスを提供します。eMessage を使用すると、ご使用の顧客データマートに格納された情報に基づいてカスタマイズされたメッセージを設計し、送信し、個別にモニターすることができます。

Campaign で、フローチャートを使用して、E メール受信者のリストを作成し、各受信者のパーソナライズ・データを選択します。

eMessage では、Eメールの設計、送信、および配信に関して IBM によってホストされるリソースを使用して、Eメール・マーケティング・キャンペーンを行います。

IBM Campaign をインストールするときに、インストーラーは IBM eMessage をサポートするために必要なファイルを自動的に組み込みます。eMessage について、以下のアクションが実行されます。

- eMessage が Campaign ディレクトリー構造内にサブディレクトリーとして作成されます。
- eMessage 構成プロパティーが IBM Marketing Platform でリストされます。ただし、それらの構成プロパティーはアクティブではありません。

- eMessage 固有のデータベース表が Campaign スキーマに作成されます。ただし、データベースに入っているのは初期データのみです。
- メニューなど eMessage に固有の機能は、eMessage を使用可能にして構成するまで表示されません。

パーソナライズされたマーケティング E メールを送信するためには、その前に、ホストされた E メール・アカウントを IBM に要求する必要があります。

E メール・アカウントを要求すると、IBM はコンサルテーション・プロセスを開始します。このプロセスは、お客様に eMessage に慣れ親しんでいただくこと、ホストされた E メール・リソースにお客様を接続すること、および主要インターネット・サービス・プロバイダー (ISP) の間で正当な E メール・マーケティング担当者としての評判を確立することを目的としています。顧客や見込み顧客へのマーケティング・メッセージの配信が成功するためには、好ましい評判を確立することが非常に重要です。

eMessage を使用可能にして構成する方法、およびホストされた E メール・アカウントを準備する方法について詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

eMessage コンポーネント

eMessage には、受信者リスト・アップローダー (RLU) と、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) と呼ばれる特殊なコンポーネントが必要です。

RLU は、Campaign と連動して、E メール受信者のリストに関連付けられたアドレス、パーソナライズ・データ、およびメタデータを IBM EMM Hosted Services にアップロードする、eMessage プラグイン・コンポーネントです。

eMessage RCT は、IBM EMM Hosted Services からリンク・トラッキングおよび E メール配信通知データを取得し、Campaign スキーマ内にある eMessage システム・テーブルに保管します。

eMessage コンポーネントは、IBM eMessage を使用可能にして構成した場合に作動します。eMessage を使用可能にして RLU および RCT と連動する方法について詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルトでのコンポーネントのインストール場所

IBM インストーラーは、Campaign J2EE アプリケーションがインストールされたコンピューター上に RLU を配置します。RLU の場所は、「キャンペーン」>「パーティション」>「パーティション 1」>「eMessage」>「eMessagePluginJarFile」構成プロパティに記録されます。

インストーラーは、Campaign サーバーがインストールされたコンピューター上に RCT を配置します。

J2EE コンポーネントとサーバー・コンポーネントが別々のコンピューターにある場合は、各マシンでインストーラーを実行して、J2EE アプリケーションに対しては RLU を、Campaign サーバーに対しては RCT をそれぞれインストールしてください。

複数のパーティションでの eMessage コンポーネント

eMessage インストール済み環境全体に存在する RLU は 1 つです。インストーラーは、デフォルトのパーティションの eMessagePluginJarFile 構成プロパティのみを取り込みます。eMessage インストール済み環境で複数のパーティションを使用している場合は、他のすべてのパーティションの RLU の場所を手動で構成する必要があります。eMessagePluginJarFile プロパティに指定する場所は、すべてのパーティションで同じです。詳しくは、70 ページの『eMessage の受信者リスト・アップローダーの場所の指定』を参照してください。

eMessage インストール済み環境全体で 1 つの RCT しか存在しません。eMessage では、RCT の位置を構成プロパティに指定する必要はありません。RCT で受信されるレスポンスが、適切なレスポンス属性に対して該当するローカル・パーティションを自動的に指定します。

Campaign と IBM EMM 製品の統合

Campaign を複数の IBM EMM 製品と統合して、キャンペーンをカスタマイズすることができます。

Campaign は、以下の IBM EMM 製品と統合します。

- IBM Marketing Operations
- IBM Digital Analytics
- IBM SPSS[®] Modeler Marketing Edition

詳しくは、各製品の資料を参照してください。さらに、Campaign とその他の IBM EMM 製品の統合について詳しくは、「*IBM Campaign インストール・ガイド*」を参照してください。

重要: Campaign と PredictiveInsight の統合はサポートされなくなりました。PredictiveInsight は IBM SPSS Modeler Advantage Marketing Edition に置き換えられました。PredictiveInsight を使用している Campaign インストール済み環境に Campaign バージョン 9.1 をインストールすると、既存のフローチャートのモデル処理およびスコア処理を使用できなくなります。Campaign で予測モデリングを引き続き使用するには、IBM SPSS Modeler Advantage Marketing Edition をインストールして、必要な処理を再定義する必要があります。詳しくは、「*IBM Campaign および IBM SPSS Modeler Advantage Marketing Edition 統合ガイド*」を参照してください。

IBM Campaign の資料のロードマップ

IBM Campaign には、ユーザー、管理者、および開発者用の資料とヘルプが備わっています。

表 3. 概要情報

作業	資料
新機能、既知の問題、および制約事項のリストを表示する	<i>IBM Campaign</i> リリース・ノート
Campaign データベースの構造について知る	<i>IBM Campaign System Tables and Data Dictionary</i>

表 3. 概要情報 (続き)

作業	資料
Campaign をインストール/アップグレードして Campaign Web アプリケーションをデプロイする	次のいずれかのガイドを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> • <i>IBM Campaign</i> インストール・ガイド • <i>IBM Campaign</i> アップグレード・ガイド
eMessage を実装する (eMessage を購入した場合)	<ul style="list-style-type: none"> • 「<i>IBM Campaign</i> インストール・ガイド」および「<i>アップグレード・ガイド</i>」では、ローカル環境における eMessage コンポーネントのインストールと準備の方法が説明されています。 • 「<i>IBM eMessage</i> 起動および管理者ガイド」には、ホスト・メッセージング・リソースに接続する方法が説明されています。
Campaign に備わっている IBM Cognos® レポートを実装する	<i>IBM EMM Reports</i> インストールおよび構成ガイド

表 4. Campaign の構成と使用

作業	資料
<ul style="list-style-type: none"> • 構成とセキュリティーの設定を調整する • ユーザー用に Campaign を準備する • ユーティリティーを実行して保守を行う • Campaign を Digital Analytics と統合する 	<i>IBM Campaign</i> 管理者ガイド
<ul style="list-style-type: none"> • マーケティング・キャンペーンを作成およびデプロイする • キャンペーン結果を分析する 	<i>IBM Campaign</i> ユーザー・ガイド
フローチャート・パフォーマンスを改善する	<i>IBM Campaign</i> チューニング・ガイド
Campaign マクロを使用する	<i>IBM EMM</i> のマクロ ユーザー・ガイド

表 5. Campaign と他の製品との統合

作業	資料
eMessage オファー統合を構成する。	<i>IBM Campaign</i> 管理者ガイド
Campaign を Digital Analytics と統合して使用する	<i>IBM Campaign</i> 管理者ガイド
Campaign を IBM SPSS Modeler Advantage Marketing Edition と統合して使用する	<i>IBM Campaign</i> および <i>IBM SPSS Modeler Advantage Marketing Edition</i> 統合ガイド
Campaign を Marketing Operations と統合して使用する	<i>IBM Marketing Operations</i> および <i>IBM Campaign</i> 統合ガイド

表 6. Campaign 用の開発

作業	資料
API を使用したカスタム・プロシーチャーを開発する	<ul style="list-style-type: none"> • <i>IBM Campaign</i> オファー API 仕様 • devkits¥CampaignServicesAPI の JavaDocs
Java™ プラグインまたはコマンド行実行可能プログラムを開発して Campaign に検証を追加する	<ul style="list-style-type: none"> • <i>IBM Campaign</i> 検証 PDK ガイド • devkits¥validation の JavaDocs

表7. ヘルプの利用

作業	説明
オンライン・ヘルプを開く	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ヘルプ」>「このページのヘルプ」と選択し、コンテキスト・ヘルプ・トピックを開きます。 2. ヘルプ・ウィンドウの「ナビゲーションの表示 (Show Navigation)」アイコンをクリックして、詳細ヘルプを表示します。
PDF を入手する	<p>以下のいずれかの方法を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「ヘルプ」>「製品資料」と選択し、Campaign PDF にアクセスします。 • 「ヘルプ」>「IBM EMM Suite のすべての資料」と選択し、すべての使用可能な資料にアクセスします。 • IBM EMM インストーラーにおけるインストール・プロセス中にすべての資料にアクセスします。
サポートを利用する	<p>http://www.ibm.com/ へアクセスし、「Support & downloads」をクリックして IBM サポート・ポータルへアクセスします。</p>

第 2 章 Campaign アップグレードの計画

現行バージョンの Campaign をアップグレードして、最新の機能を持つ最新バージョンにすることができます。

前提条件

IBM EMM 製品をインストールまたはアップグレードするには、その前に、ご使用のコンピューターがすべてのソフトウェアおよびハードウェアの前提条件を満たしていることを確認する必要があります。

システム要件

システム要件について詳しくは、「推奨ソフトウェア環境および最小システム要件」ガイドを参照してください。

ネットワーク・ドメイン要件

スイートとしてインストールされる IBM EMM 製品は同じネットワーク・ドメインにインストールする必要があります。これは、クロスサイト・スクリプティングで生じ得るセキュリティー・リスクを制限することを目的としたブラウザー制限に準拠するためです。

JVM 要件

スイート内の IBM EMM アプリケーションは、専用の Java™ 仮想マシン (JVM) 上に配置する必要があります。IBM EMM 製品は、Web アプリケーション・サーバーが使用する JVM をカスタマイズします。JVM に関連するエラーが発生する場合、IBM EMM 製品専用の Oracle WebLogic または WebSphere®ドメインを作成する必要があります。

知識要件

IBM EMM 製品をインストールするには、製品をインストールする環境全般に関する知識が必要です。この知識には、オペレーティング・システム、データベース、および Web アプリケーション・サーバーに関する知識が含まれます。

アクセス権限

インストール作業を完了するため、以下のネットワーク権限を保持していることを確認してください。

- 必要なすべてのデータベースに対する管理権限。
- Web アプリケーション・サーバーおよび IBM EMM コンポーネントを実行するために使用するオペレーティング・システム・アカウントの関連ディレクトリーおよびサブディレクトリーに対する読み取りおよび書き込みアクセス権限
- 編集する必要があるすべてのファイルに対する書き込み権限

- インストール・ディレクトリーやアップグレード時のバックアップ・ディレクトリーなどの、ファイルを保存する必要があるすべてのディレクトリーに対する書き込み権限
- インストーラーを実行するための適切な読み取り/書き込み/実行権限

Web アプリケーション・サーバーの管理パスワードを保持していることを確認してください。

UNIX の場合、以下の追加の権限が必要です。

- Campaign および Marketing Platform をインストールするユーザー・アカウントは、Campaign ユーザーと同じグループのメンバーである必要があります。このユーザー・アカウントには、有効なホーム・ディレクトリーがなければならず、そのディレクトリーに対する書き込み権限も必要です。
- IBM 製品のすべてのインストーラー・ファイルはフル権限 (例えば、`rwxf-r-x`) が必要です。

JAVA_HOME 環境変数

IBM EMM 製品をインストールするコンピューターに **JAVA_HOME** 環境変数が定義されている場合、サポートされる JRE のバージョンがこの変数で指定されていることを確認してください。システム要件について詳しくは、「推奨ソフトウェア環境および最小システム要件」ガイドを参照してください。

JAVA_HOME 環境変数が JRE 1.6 を指していることを確認します。 **JAVA_HOME** 環境変数が正しくない JRE を指している場合、IBM EMM インストーラーを実行する前に、その **JAVA_HOME** 変数をクリアする必要があります。

以下のいずれかの方法により、**JAVA_HOME** 環境変数をクリアできます。

- Windows: コマンド・ウィンドウで、**set JAVA_HOME=** (空のままにする) と入力して、Enter キーを押します。
- UNIX: 端末で、**export JAVA_HOME=** (空のままにする) と入力して、Enter キーを押します。

export JAVA_HOME= (空のままにする)

環境変数をクリアした後、IBM EMM インストーラーは、インストーラーにバンドルされている JRE を使用します。インストールの完了後、この環境変数を再設定できます。

Marketing Platform の要件

何らかの IBM EMM 製品をインストールする前に、Marketing Platform をインストールする必要があります。一緒に機能する製品のグループごとに、Marketing Platform を 1 回だけインストールする必要があります。各製品インストーラーは、必要な製品がインストールされているかどうかを検査します。ご使用の製品またはバージョンが Marketing Platform に登録されていない場合、インストールを続行する前に、Marketing Platform をインストールまたはアップグレードすることを求めるメッセージが表示されます。「設定」>「構成」ページでプロパティを設定するには、その前に、Marketing Platform が配置済みであり、稼働している必要があります。

Campaign のバックアップ

Campaign をアップグレードする前に、Campaign の現行インストール済み環境をバックアップする必要があります。 Campaign の現行インストール済み環境をバックアップすることで、アップグレード・プロセス中に何らかの問題が発生した場合に、Campaign のインストール済み環境を既知の作業状態に確実にリストアすることができます。 Campaign のインストール済み環境のバックアップは、インストーラーの実行時に手動または自動で行えます。

Campaign の現行インストール済み環境を手動でバックアップするには、以下の手順に従います。

1. Campaign インストール・ディレクトリーをバックアップします。 eMessage がインストールされている場合、eMessage インストール・ディレクトリーをバックアップします。

Campaign アップグレード・プロセスにより、Campaign と eMessage の実行に必要なすべてのファイルがインストールされます。 eMessage がインストールされている場合、Campaign アップグレード・プロセスにより、 Campaign のアップグレード時に eMessage のインストール済み環境がアップグレードされます。

2. Campaign および eMessage (eMessage がインストールされている場合) の既存のインストール済み環境で使用されるシステム・テーブル・データベースをバックアップします。

データのバックアップを作成する手順については、ご使用のデータベースの資料を参照してください。

構成設定のエクスポート

Campaign のアップグレード・バージョンで、Campaign の現行インストール済み環境の構成設定を使用することができます。 IBM **configTool** ユーティリティを使用して、アップグレードの前に Campaign 構成パラメーターをエクスポートします。 configTool ユーティリティが作成する **exported.xml** ファイルの固有のファイル名と場所を指定し、アップグレード・プロセスの完了後にそのファイルを見つめられるように、メモに記録します。

アップグレード・ログ

acUpgradeTool は、処理に関する詳細、警告、およびエラーをログ・ファイルに書き込みます。アップグレード・ツールを実行する前に **setenv** スクリプト・ファイルを編集することにより、ログ・ファイルの場所と冗長レベルを調整できます。 **setenv** ファイルはアップグレード・ツールと同じフォルダーに保管されています。

ac_upgrade.log は、デフォルトのログ・ファイルです。 **ac_upgrade.log** ログ・ファイルは、Campaign インストール・ディレクトリーの **logs** フォルダーに保管されています。

アップグレード・ログで警告およびエラーを確認し、エラーを修正してから、アップグレードを完了してください。

注: 同じ場所には、CHRH.log も生成されます。CHRH.log ファイルは、サイズが 0 KB なので、無視して構いません。

すべての IBM EMM 製品のアップグレード前提条件

シームレスなアップグレード体験を確実にするために、Campaign をアップグレードする前に、権限、オペレーティング・システム、および正しい知識に関するすべての要件を満たしてください。

以前のインストールによって生成された応答ファイルの削除

バージョン 8.6.0 より前からアップグレードする場合、以前の Campaign インストールで生成された応答ファイルを削除する必要があります。古い応答ファイルは 8.6.0 以降のインストーラーとは互換性がありません。

古い応答ファイルを削除しないと、インストーラーを実行する際にインストーラー・フィールドに間違ったデータが事前に取り込まれてしまったり、インストーラーによって一部のファイルがインストールできなかったり、構成ステップがスキップされてしまったりする可能性があります。

IBM 応答ファイルの名前は `installer.properties` です。

それぞれの製品の応答ファイルの名前は、`installer_productversion.properties` です。

インストーラーは、インストール時に指定したディレクトリーに応答ファイルを作成します。デフォルトの場所はユーザーのホーム・ディレクトリーです。

UNIX のユーザー・アカウント要件

UNIX の場合、インストーラーが以前のインストールの検出に失敗していない限り、製品をインストールしたユーザー・アカウントでアップグレードを完了しなければなりません。

32 ビットから 64 ビットへのバージョンアップ

Campaign を 32 ビット・バージョンから 64 ビット・バージョンに移行する場合、以下のタスクを完了していることを確認してください。

- 製品データ・ソースのデータベース・クライアント・ライブラリーが 64 ビットであることを確認する。
- すべての関連ライブラリー・パス (例えば開始スクリプトや環境スクリプト) が、64 ビット・バージョンのデータベース・ドライバーを正しく参照していることを確認する。

Oracle または DB2 の自動コミットの要件

Marketing Platform システム・テーブルが Oracle または DB2® にある場合、開かれている環境の自動コミット・モードを有効にする必要があります。

詳しくは、Oracle または DB2 の資料を参照してください。

ユーザー定義のグループ名および役割名の変更

Campaign をアップグレードする前に、Marketing Platform をアップグレードする必要があります。Marketing Platform をアップグレードする際の問題を避けるには、ユーザーによって作成されるグループと役割の名前が、Marketing Platform によって定義されるグループまたは役割の名前と異なっている必要があります。

名前が同じである場合、アップグレード前に作成したグループまたは役割の名前を変更する必要があります。例えば、Admin という名前のグループまたは役割を作成した場合、名前を変更する必要があります。Admin は Campaign で使用される名前だからです。

Campaign アップグレード・ワークシート

acUpgradeTool を実行する前に、Campaign インストール済み環境に関する情報を収集する必要があります。

Campaign インストール済み環境に関する以下の情報を収集します。

- Marketing Platform インストール・ディレクトリーの絶対パス (setenv ファイル内の UNICA_PLATFORM_HOME)。Campaign とは別のマシンに Marketing Platform がインストールされている場合は、UNICA_PLATFORM_HOME パスではなく CAMPAIGN_HOME パスを指定してください。
- Campaign インストール・ディレクトリーの絶対パス (setenv ファイル内の CAMPAIGN_HOME)。
- 複数のパーティションをアップグレードする場合は、アップグレードするパーティションの名前
- ターゲット Campaign システムの接続情報 (URL およびポート)
- 接続タイプ (WebLogic または JDBC) および JAR ファイルの場所
- JDBC ドライバーの Java™ クラス名
- JDBC URL
- JDBC ドライバーに必要な追加プロパティ (ある場合)
- ターゲット・システム・テーブル・データベースのユーザー名とパスワード
- ターゲット・システム・テーブルのカタログ (またはデータベース)
- ターゲット・システム・テーブルのスキーマ
- アップグレード前の Campaign のバージョン
- Campaign 構成ファイル (campaign_configuration.xml) の絶対パスまたは相対パス。このファイルは、Campaign インストール済み環境の conf ディレクトリーにあります。

Campaign アップグレード・シナリオ

IBM Campaign をバージョン 8.5.x.x、8.6.x.x、または 9.x から version 9.1 にアップグレードすることができます。それ以外のバージョンの Campaign がインストールされている場合、まず Campaign v8.6 をインストールし、その後に Campaign v9.1 にアップグレードする必要があります。

以下の表は、現時点の Campaign のバージョンが 8.5.x.x、8.6.x.x、または 9.x 以外である場合に Campaign 9.1 をインストールするために実行する必要があるタスクに関する情報を示しています。

eMessage は Campaign の一部としてインストールまたはアップグレードされます。eMessage を現在使用している場合、または使用することを計画している場合は、29 ページの『第 4 章 eMessage のアップグレードに関する考慮事項』を参照してください。

表 8. Campaign のインストール・シナリオ

現在インストールされているもの	アップグレード・パス	eMessage ユーザーのための重要な注記
5.1+ または 6.x のいずれかのバージョン	<p>Campaign v8.6 をインストールし、その後 Campaign v9.1 にアップグレードするには、以下の手順に従います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新しい場所で「<i>IBM Campaign</i> インストール・ガイド v8.6」の手順に従います。 2. Campaign v8.6 に付属のデータ・マイグレーション・スクリプトを実行します。詳しくは、「<i>IBM Campaign</i> データ・マイグレーション・ガイド v8.6」を参照してください。 3. この表の『8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン』の行にある手順に従います。 	なし。

表 8. Campaign のインストール・シナリオ (続き)

現在インストールされているもの	アップグレード・パス	eMessage ユーザーのための重要な注記
7.0.x から 7.3.x までのいずれかのバージョン	<p>バージョン 7.0.x から 7.3.x にアップグレードするには、以下の手順に従います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ソース・バージョン上に Campaign v8.6 のインプレース・インストールを行います (eMessage 7.x を同時に使用していない場合)。現行インストール済み環境と同じ場所を選択します。こうすることで、インストーラーは自動的にアップグレード・モードで実行されます。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 2. 8.6 アップグレード・ツール (<i>Campaign_Home/tools/migration/5.1+To8.6/acUpgradeTool</i>) を実行します。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 3. これらのバージョンの Campaign でのレポートは、Affinium Reports (バージョン 7.0.x から 7.2.x) によって提供されていました。Affinium Reports 7.2.1 から v8.6 のレポートへのアップグレード・パスはありません。したがって、これらのバージョンからのアップグレード後に、「<i>IBM Marketing Platform インストール・ガイド v8.6</i>」の説明に従って、新規レポートを構成する必要があります。 4. この表の『8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン』の手順に従います。 	<p>eMessage 7.x を Campaign 7.x と共に使用している場合は、インプレース・アップグレードを行わない てください。 eMessage 7.x を保持し、Campaign v8.6 を異なる場所に新規インストールする必要があります。</p> <p>「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6.</i>」に記載されている eMessage アップグレードの手順に注意深く従ってください。</p> <p>重要: eMessage 7.x インストール済み環境を新たな eMessage インストール済み環境に移行するための戦略を、IBM と協力して立てることを強くお勧めします。</p>

表 8. Campaign のインストール・シナリオ (続き)

現在インストールされているもの	アップグレード・パス	eMessage ユーザーのための重要な注記
7.5.x から 8.2.x までのいずれかのバージョン	<p>バージョン 7.5.x から 8.2.x にアップグレードするには、以下の手順に従います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ソース・バージョン上に Campaign v8.6 のインプレース・インストールを行います (eMessage 7.x を同時に使用していない場合)。現行インストール済み環境と同じ場所を選択します。こうすることで、インストーラーは自動的にアップグレード・モードで実行されます。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 2. 8.6 アップグレード・ツール (<i>Campaign_Home/tools/migration/5.1+To8.6/acUpgradeTool</i>) を実行します。詳しくは、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6</i>」を参照してください。 3. 「<i>IBM Marketing Platform インストール・ガイド v8.6</i>」の説明に従って、レポートをアップグレードします。 4. この表の『8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン』の手順に従います。 	<p>eMessage 7.x を Campaign 7.x と共に使用している場合は、インプレース・アップグレードを行わない てください。 eMessage 7.x を保持し、Campaign v8.6 を異なる場所に新規インストールする必要があります。</p> <p>「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v8.6.</i>」に記載されている eMessage アップグレードの手順に注意深く従ってください。</p> <p>重要: eMessage 7.x インストール済み環境を新たな eMessage インストール済み環境に移行するための戦略を、IBM と協力して立てることを強くお勧めします。</p>
8.5.x から 8.6.x までのいずれかのバージョン	<p>バージョン 8.5.x から 8.6.x にアップグレードするには、以下の手順に従います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 8.5 または 8.6 バージョン上に Campaign v9.1 のインプレース・インストールを行います。現行インストール済み環境と同じ場所を選択します。こうすることで、インストーラーは自動的にアップグレード・モードで実行されます。「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v9.1</i>」に記載されている手順に従ってください。 2. 9.x アップグレード・ツール (<i>Campaign_Home/tools/upgrade/8.5+To9.1/acUpgradeTool</i>) を実行します。「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v9.1</i>」に記載されている手順に従ってください。 3. 「<i>IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド v9.1</i>」の説明に従って、レポートをアップグレードします。 	<p>eMessage をアップグレードするときに、「自動 DB セットアップ」を選択する必要はありません。このオプションは、eMessage システムがまだ存在しない場合の新規インストールのためのものです。</p>

表 8. Campaign のインストール・シナリオ (続き)

現在インストールされているもの	アップグレード・パス	eMessage ユーザーのための重要な注記
バージョン 9.0	<p>9.0 からアップグレードするには、以下の手順に従います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Campaign インストール・ディレクトリーの IBM EMM インストーラーおよび Campaign インストーラーを実行します。インストーラーは自動的にアップグレード・モードで実行されます。インストーラーの実行中、「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v9.0</i>」に記載されている手順に従ってください。 2. 9.x アップグレード・ツール (<i>Campaign_Home/tools/upgrade/8.5+To9.1/acUpgradeTool</i>) を実行します。「<i>IBM Campaign インストール・ガイド v9.1</i>」に記載されている手順に従ってください。 3. 「<i>IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド v9.1</i>」の説明に従って、レポートをアップグレードします。 	<p>eMessage をアップグレードするときに、「自動 DB セットアップ」を選択する必要はありません。このオプションは、eMessage システムがまだ存在しない場合の新規インストールのためのものです。</p>

注: アップグレードを完了したら、ブラウザー・キャッシュをクリアする必要があります。また、Campaign アプリケーションを更新する Campaign フィックス・バックや Campaign 暫定修正のインストール後にも、ブラウザー・キャッシュをクリアする必要があります。

第 3 章 Campaign のアップグレード

Campaign 8.5.x、8.6.x、または 9.0 からのアップグレードは、インプレース・アップグレードとなります。Campaign の新しいバージョンを現行インストール済み環境と同じディレクトリーにインストールする必要があります。その目的で Campaign はアップグレードを検出することができます。Campaign のアップグレードは、インストーラーをアップグレード・モードで実行するというステップと、**acUpgradeTool** を実行するというステップの、2 つのメイン・ステップからなります。

注: Campaign と Contact Optimization は一緒にアップグレードする必要があります。Campaign と Contact Optimization を一緒にアップグレードしない場合、Contact Optimization リスナーを手動で停止する必要があります。

Campaign のアンデプロイとアップグレード

Campaign をアップグレードする前に、Campaign の現行インストール済み環境をアンデプロイする必要があります。

Campaign の現行インストール済み環境をアンデプロイするには、以下の手順に従います。

1. 次のいずれかの方式を使用して、Campaign リスナーを停止します。
 - UNIX の場合は、**./rc.unica_ac stop** コマンドを root として実行します。
 - Windows の場合は、Campaign bin ディレクトリーに移動して、次のコマンドを実行します。 **svrstop -p 4664**

CAMPAIGN_HOME 環境変数の指定が求められたら、**set CAMPAIGN_HOME=C:¥installation_pathCampaign** というコマンドを使用して CAMPAIGN_HOME 環境変数を設定します。

CAMPAIGN_HOME 環境変数を設定した後、ここで示すとおりを設定を実行した後、**svrstop** コマンドを再度実行します。

2. また、実行されている可能性のある Campaign ユーティリティー (**unica_***) を停止します。手順については、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

このステップをスキップした場合、インストーラーは実行中のプロセスがあるかどうかを検出して、それらを停止することを要求します。

3. Web アプリケーション・サーバーの指示に従って、Campaign.war ファイルを配置解除し、すべての変更を保存するかアクティブにします。
4. Web アプリケーション・サーバーをシャットダウンしてから再始動することで、Campaign.war ファイルのロックを解除します。

Campaign の現行インストール済み環境をアンデプロイした後、アップグレード・モードで EMM インストーラーを実行することができます。インストーラーをアップグレード・モードで実行する場合は、以下のガイドラインに従ってください。

- EMM インストーラーがアップグレード・モードで実行されるようにするには、インストーラーを実行するときに現行インストール済み環境と同じディレクトリを選択します。インストーラーは、Campaign の既存のバージョンを検出し、アップグレードを確認するよう求めるプロンプトを出します。
- バージョン 9.x にアップグレードする場合は、インストーラー・オプションの「自動 DB セットアップ」を選択しないでください。このオプションは新規インストールのためのものであり、アップグレードは対象としていません。
- 他の IBM 製品がインストールされているシステムでインストーラーを再実行する場合、アップグレード・プロセス中にインストーラーで Campaign だけが選択されていることを確認します。
- 応答ファイルが既に作成済みで不在モードで実行する場合、インストーラーは以前に設定されたインストール・ディレクトリを使用します。応答ファイルがないときに不在モードを使用してアップグレードする場合は、初回のインストール時にインストーラーを手動で実行して応答ファイルを作成し、インストール・ウィザードで現行のインストール・ディレクトリを必ず選択してください。
- Campaign リスナーがサーバーにインストールされており、J2EE が別のサーバーにインストールされている分散システムがある場合、以下のタスクを実行して Campaign をアップグレードします。
 1. Campaign リスナーがインストールされているサーバーで Campaign インストーラーを実行します。インストーラーの「Campaign コンポーネント (Campaign Components)」ウィンドウで「Campaign サーバー」オプションが選択されていることを確認します。
 2. J2EE がインストールされているサーバーで Campaign インストーラーを実行します。インストーラーの「Campaign コンポーネント (Campaign Components)」ウィンドウで「Campaign サーバー」オプションがクリアされていることを確認します。

アップグレード・プロセスの後、EAR ファイルを作成できます。EAR ファイルの作成について詳しくは、「IBM Campaign インストール・ガイド V9.1」を参照してください。

アップグレード・モードで EMM インストーラーを実行した後、**acUpgradeTool** を実行できます。

SQL アップグレード・スクリプト

データベース・タイプに応じて SQL アップグレード・スクリプトを使用して Campaign のインストール済み環境をアップグレードします。

SQL アップグレード・スクリプトは *Campaign_Home/tools/upgrade/8.5+To9.1* ディレクトリに保管されています。データベース・タイプに応じて、以下の表のスクリプトのいずれかを使用します。

表9. データベース・タイプ別の SQL アップグレード・スクリプト

SQL アップグレード・スクリプト	データベース・タイプ
ac_upgrade_db2.sql	DB2 アップグレード・スクリプト (非 Unicode)

表9. データベース・タイプ別の SQL アップグレード・スクリプト (続き)

SQL アップグレード・スクリプト	データベース・タイプ
ac_upgrade_db2_unicode.sql	DB2 アップグレード・スクリプト (Unicode)
ac_upgrade_oracle.sql	Oracle アップグレード・スクリプト (非 Unicode)
ac_upgrade_oracle_unicode.sql	Oracle アップグレード・スクリプト (Unicode)
ac_upgrade_sqlsvr.sql	MS SQL Server アップグレード・スクリプト (非 Unicode)
ac_upgrade_sqlsvr_unicode.sql	MS SQL Server アップグレード・スクリプト (Unicode)

SQL アップグレード・スクリプトに対する変更

Campaign データベース表に対して行われる変更を反映するように SQL アップグレード・スクリプトを変更する必要があります。以下の表を使用して、いくつかの SQL アップグレード・スクリプトに対して行う必要がある変更に関する理解を深めてください。

表10. SQL アップグレード・スクリプトに対する変更

変更後の Campaign データベース表の名前	SQL アップグレード・スクリプトで必要な変更
UA_ContactHistory テーブル	<p>既存の Campaign 環境で、UA_ContactHistory テーブルの CustomerID フィールドが ID に変更されています。</p> <p>フィールド名の変更に対応するには、アップグレード・スクリプト内のすべての CustomerID の出現箇所を ID に変更します。</p>

表 10. SQL アップグレード・スクリプトに対する変更 (続き)

変更後の Campaign データベース表の名前	SQL アップグレード・スクリプトで必要な変更
HH_ContactHistory HH_ResponseHistory HH_DtlContactHist	<p>既存の Campaign 環境に、Household という名前の追加オーディエンス・レベルが含まれています。このオーディエンス・レベルをサポートするために、データベースに HH_ContactHistory、HH_ResponseHistory および HH_DtlContactHist というテーブルがあります。1次キーは HouseholdID です。</p> <p>新規 Campaign インストール済み環境で Household オーディエンス・レベルをサポートするために、以下のタスクを実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Customer オーディエンス・レベルのレスポンス履歴および処理サイズを更新する SQL アップグレード・スクリプト内のコードを見つけます。 2. Household オーディエンス・レベルにコードを複製します。 3. ステートメント内のテーブル名を、Household オーディエンス・レベルで適切な名前に変更し、CustomerID の参照を HouseholdID に変更します。 <p>以下のサンプル SQL ステートメントは、Household オーディエンス・レベルが含まれる、SQL Server データベースの <code>ac_upgrade_sqlsvr.sql</code> スクリプトに対して行う必要がある追加を示しています。Household オーディエンス・レベルをサポートするように変更されているテキストは太字で示されています。</p> <pre>-- ResponseHistory update "template" ALTER TABLE HH_ResponseHistory ADD DirectResponse int NULL go -- Update the treatment sizes update ua_treatment set treatmentsize=(select count(DISTINCT HouseholdID) from HH_ContactHistory where HH_ContactHistory.CellID = ua_treatment.CellID AND HH_ContactHistory.PackageID = ua_treatment.PackageID and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 0) where exists (select * from hh_contacthistory where hh_contacthistory.CellID = ua_treatment.CellID AND hh_contacthistory.PackageID = ua_treatment.PackageID and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 0) go update ua_treatment set treatmentsize=(select count(DISTINCT HouseholdID) from HH_DtlContactHist where HH_DtlContactHist.TreatmentInstID = ua_treatment.TreatmentInstID and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 1) where exists (select * from hh_dtcontacthist where hh_dtcontacthist.TreatmentInstID = ua_treatment.TreatmentInstID and ua_treatment.CntrlTreatmtFlag = 1 and ua_treatment.HasDetailHistory = 1) go</pre>

データベース表およびオーディエンス・レベルの管理について詳しくは、「*IBM Campaign* 管理者ガイド」を参照してください。

acUpgradeTool

acUpgradeTool は、Campaign システム・テーブルを更新するとともにユーザー・データを変更して、新しいバージョンの Campaign と連動するようにします。EMM インストーラーをアップグレード・モードで実行した後、**acUpgradeTool** を実行できます。

Campaign 9.x の環境変数の設定

acUpgradeTool を実行する前に、`setenv` ファイルを編集して、**acUpgradeTool** ツールが必要とする環境変数を設定します。

以下のアクションを実行し、Campaign 9.x の環境変数を設定します。

1. Windows の場合、`setenv` ファイルをテキスト・エディターで開きます。UNIX の場合、`setenv.sh` ファイルをテキスト・エディターで開きます。`setenv` または `setenv.sh` ファイルは、9.x アップグレード・ツールをインストールしたディレクトリーに保管されています (例えば、`Campaign_Home/tools/upgrade/8.5+To9.1`)。
2. `setenv` ファイル内の説明に従って、インストールに関連する値を入力します。以下の表には、変数のリストが含まれています。

表 11. `setenv` ファイルの変数:

変数	説明
<code>JAVA_HOME</code>	必須。 Campaign インストールによって使用される JDK のルート・ディレクトリー。 WebLogic の場合は、JDK1.6 の <code>JAVA_HOME</code> パスを指定する必要があります。JDK1.6 以外の <code>JAVA_HOME</code> を指定すると、アップグレード・ツール・ユーティリティーは失敗します。
<code>JDBC_DRIVER_CLASSPATH</code>	必須。 .jar ファイルを含む JDBC ドライバーの絶対パス。 WebLogic の場合も WebSphere の場合も、パスに .jar ファイルを含める必要があります。
<code>IS_WEBLOGIC_SSL</code> <code>BEA_HOME_PATH</code> <code>SSL_TRUST_KEYSTORE_FILE_PATH</code>	SSL を使用し、かつターゲット・システム・テーブルへの接続が WebLogic サーバー経由である場合は必須。 IS_WEBLOGIC_SSL=YES を設定して、 <code>BEA_HOME_PATH</code> と <code>SSL_TRUST_KEYSTORE_FILE_PATH</code> を設定します。詳しくは、 <code>setenv</code> ファイルを参照してください。

表 11. `setenv` ファイルの変数: (続き)

変数	説明
その他の変数	<p>設定可能なオプション変数が多数あります。以下に例を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> Unicode スクリプトを実行するには、IS_UNICODE_SCRIPT = YES を設定します。 アップグレード・ツール実行中のメモリー・エラーを回避するには、より大きい Java ヒープ・メモリー・サイズを JAVA_OPTIONS 環境変数で指定します。 <p>説明は、<code>setenv</code> ファイルを参照してください。</p>

acUpgradeTool の実行

Campaign をアップグレードするには、アップグレード・モードでインストーラーを実行した後、**acUpgradeTool** を実行します。

acUpgradeTool を正常に実行するには、以下の情報を確認してください。

- アップグレード・ツールが必要とする情報を使用して `setenv` ファイルがカスタマイズされている。
- アップグレード・ツールを実行するコンピューターにそのアップグレード・ツールがインストールされている。セットアップが分散されている場合、これらのツールを、Campaign Web アプリケーションがインストールされているコンピューターにインストールする必要があります。Campaign のインストール時にアップグレード・ツールをインストールしなかった場合は、インストーラーを再度実行して、「アップグレード・ツール」 オプションのみ選択してください。
- Campaign システム・テーブルのデータ・ソース用の該当するデータベース・クライアント実行可能ファイル (db2, osql, または sqlplus) が、アップグレード・ツールを実行するユーザーの PATH でアクセス可能である。

ツールをアップグレードする前に、以下の手順を実行しておきます。

- アップグレード・モードでの Campaign インストーラーの実行。
- Campaign の再配置。
- RCT の再始動 (eMessage を使用している場合)。
- SQL スクリプトの変更 (必要な場合) およびツールの実行時に入力する情報の収集。

注: 複数のパーティションがある場合は、それぞれのパーティションに合わせてアップグレード・ツールを構成し、各パーティションに対して 1 回実行する必要があります。

以下のアクションを実行して **acUpgradeTool** を実行し、アップグレード・プロセスを完了します。

- ターゲット・システムの Web アプリケーション・サーバーおよび IBM EMM Web アプリケーションを始動します。
- Campaign リスナーが停止されていることを確認します。

実行されている可能性のある Campaign ユーティリティー (unica_*) をすべて停止します。手順については、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

3. Campaign をインストールしたパスにあるアップグレード・ツールを実行します (例えば、*Campaign_Home/tools/upgrade/8.5+To9.1/acUpgradeTool*)。
4. 要求される情報をプロンプトで入力し、新規バージョンの Campaign 用にシステム・テーブルをアップグレードします。
5. 以下のいずれかの手順を実行して、Campaign リスナーを再始動します。
 - Windows の場合は、Campaign インストール済み環境の bin ディレクトリーにある *cmpServer.bat* ファイルを実行します。
 - UNIX の場合は、次のコマンドを root として実行します。

```
./rc.unica_ac start
```

acUpgradeTool を実行した後、以下の手順に従います。

1. Campaign リスナー (サーバーとも呼ばれる) を必ず再始動してください。
2. eMessage を使用している場合、RCT を再始動します。

RCT を手動で再始動するには、**rct start** コマンドを使用します。RCT スクリプトは、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにあります。

RCT がインストールされているマシンのオペレーティング・システムを再始動するたびに RCT を再始動するには、RCT をサービスとして追加します。手順については、91 ページの『eMessage MKService_rct スクリプト』を参照してください。

注: RCT をサービスとして再始動する場合、1 回目は手動で RCT を再始動する必要があります。

第 4 章 eMessage のアップグレードに関する考慮事項

最新バージョンの eMessage にアップグレードするには、Campaign を同じバージョンにアップグレードする必要があります。Campaign および eMessage 9.1 へのアップグレードは、バージョン 8.5、8.6、または 9.0 から行えます。

eMessage をアップグレードするための前提条件

eMessage をアップグレードする前に、オペレーティング・システム、ハードウェアとソフトウェア、およびネットワーク・リソースとデータベース・リソースが、eMessage の現行バージョンを含め、インストールされているすべての IBM EMM アプリケーションの現行の要件を満たすことを確認します。

現行の具体的な要件については、「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」の資料を参照してください。eMessage の要件は別のセクションに記載されており、現行バージョンの Campaign の要件とは異なる場合があります。

eMessage をアップグレードする前に、バージョン 8.5、8.6、または 9.0 から Campaign および eMessage 9.1 にアップグレードすることを確認してください。従う必要があるアップグレード・パスは、使用している eMessage のバージョンによって決まります。例えば、eMessage 7.x を使用している場合は、インプレース・アップグレードを行ってはいけません。

最新バージョンの Campaign および eMessage へのアップグレードは、ホストされた E メール・アカウントの設定に影響を与えません。アップグレードを完了したら、メール配信を再開できます。

アップグレードの一部として eMessage システム・テーブルの変更がある場合は、必要なスキーマ・アップグレード・スクリプトおよびプロシージャが IBM から提供されます。

これまでに eMessage をまったく使用していなくても、eMessage の必要ファイルがアップグレードによってインストールされます。ただし、eMessage が使用可能になるわけではありません。アップグレード・モードで EMM インストーラーを実行した後、eMessage に対して配置前の構成ステップを完了する必要があります。

eMessage を使用して E メールを送信するには、IBM に連絡してホストされた E メール・サブスクリプションを購入する必要があります。E メール・サブスクリプションを購入した後の eMessage の構成方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

eMessage アップグレードのスケジューリング

eMessage をアップグレードするには、システム・コンポーネントを停止し、インターフェースをオフラインにする必要があります。また、アップグレードは IBM EMM Hosted Services との間のデータのアップロードおよびダウンロードに支障をきたします。問題を回避するために、システム上の要求が最小になる時間帯に合わ

せてアップグレードをスケジュールしてください。 eMessage をアップグレードするときには、次のガイドラインを使用してください。

- マーケティング・ユーザーが受信者リストおよび受信者データを更新しなければならない時間帯には、アップグレードを避けます。
- 標準メール配信または綿密なモニターを必要とするメール配信をマーケティング・ユーザーが実行する必要がある時間帯には、アップグレードを避けます。
- いつアップグレードを開始する予定であるかを、時間に余裕を持って全ユーザーに事前通知してください。
- スケジュールされたメール配信が実行されるように構成されている時間帯には、eMessage インストール済み環境をアップグレードしないでください。
- Marketing Platform のアップグレード直後に行われるようにアップグレードをスケジュールしてください。

受信者リストのアップロードの完了

eMessage プロセスが含まれる Campaign フローチャートを実行すると、Campaign が自動的に受信者リスト・データを出力リスト・テーブル (OLT) として IBM EMM Hosted Services にアップロードします。ただし、OLT のアップロードが、アップグレード・アクティビティによって妨げられる可能性があります。

OLT のアップロード問題を回避するために、IBM では、受信者リスト・データをアップロードする必要がない時間帯にアップグレードをスケジュールすることを推奨しています。eMessage のアップグレードを開始する前に、eMessage プロセスが含まれる Campaign フローチャートのすべてが実行を完了していることを確認してください。

進行中の受信者リスト構成作業を維持するには、アップグレードを開始する前に作業内容を保存し、すべてのローカル・ファイルおよびデータベースをバックアップします。

注: メール配信構成は IBM EMM Hosted Services に保存されるため、アップグレードによる影響を受けません。

eMessage のアップグレード

最新バージョンの eMessage にアップグレードするには、Campaign を同じバージョンにアップグレードする必要があります。Campaign および eMessage 9.1 へのアップグレードは、バージョン 8.5、8.6、または 9.0 から行えます。

現在 eMessage を使用している場合、eMessage のアップグレードを行う際に以下の情報に留意してください。

- 従う必要があるアップグレード・パスは、使用している eMessage のバージョンによって決まります。例えば、eMessage 7.x を使用している場合は、インプレーズ・アップグレードを行ってはいけません。「IBM Campaign アップグレード・シナリオ」に記載されている手順に注意深く従ってください。
- 最新バージョンの Campaign および eMessage へのアップグレードは、ホストされた E メール・アカウントの設定に影響を与えません。アップグレードを完了したら、メール配信を再開できます。

- アップグレードの一部として eMessage システム・テーブルの変更がある場合は、必要なスキーマ・アップグレード・スクリプトおよびプロシージャが IBM から提供されます。

eMessage のアップグレードは、以下のいずれかの方法で行えます。

- 現在 eMessage を使用している場合、eMessage のアップグレードは、Campaign のアップグレード中の EMM インストーラーをアップグレード・モードで実行する際に行われます。
- これまでに eMessage を使用したことがない場合、必要な eMessage ファイルが Campaign のアップグレードによってインストールされますが、eMessage が使用可能になるわけではありません。アップグレード・インストーラーを実行した後、eMessage に関連する配置前の構成ステップ (『配置前の IBM Campaign の構成』に記載) を完了する必要があります。eMessage を使用して E メールを送信するには、IBM に連絡してホストされた E メール・サブスクリプションを購入する必要があります。E メール・サブスクリプションを購入した後の eMessage の構成方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

アップグレードの後、以下のいずれかの方法でレスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を再始動します。

- RCT の手動での再始動。
- サービスとしての RCT の再始動。

手動による RCT の再始動

RCT を手動で再始動するには、**rct start** コマンドを使用します。RCT スクリプトは、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーに保管されています。詳しくは、90 ページの『eMessage レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) スクリプト』を参照してください。

サービスとしての RCT の再始動

RCT がインストールされているコンピューターを再始動するたびに RCT を再始動するには、RCT をサービスとして追加します。

注: RCT をサービスとして再始動する場合、1 回目は手動で RCT を再始動する必要があります。

eMessage アップグレード中の E メール

eMessage をアップグレードする際、eMessage メール配信インターフェースが使用不可になります。新しいメール配信を構成または開始することはできません。既に開始したメール配信は実行されますが、これらのメール配信をモニター、一時停止、または停止することはできません。

アップグレード中の E メール・レスポンス

eMessage をアップグレードする際、一時的に RCT を停止する必要があります。

アップグレード中に、メール・レスポンス・データの可用性に多少の遅延が生じる場合があります。ただし、データは失われません。IBM EMM Hosted Services

は、RCT が停止されている間、レスポンスおよびコンタクト・データをキューに入れます。RCT を再始動すると、累積されたすべてのデータがダウンロードされます。

アップグレードの間、前のメール配信中に E メールを受信した個人には、その E メール内のリンクの可用性、リンクのクリックに対するレスポンス速度、または Web サイトの要求に変化は感じられません。これらの機能は、IBM が IBM EMM Hosted Services で保守されるリソースを使用してサポートします。

第 5 章 配置前の Campaign の構成

Campaign を配置する前に、Campaign および eMessage のシステム・テーブルを作成してデータを設定し、Campaign および eMessage を手動で登録する必要があります。

手動での Campaign システム・テーブルの作成とデータ設定

デフォルトでは、Campaign インストーラーがシステム・テーブルを自動的に作成してデータを設定します。しかし、インストール中に自動的にシステム・テーブルが作成されてデータが設定されることがなかった場合には、システム・テーブルに手動でデータを設定する必要があります。データベース・クライアントを使用して Campaign SQL スクリプトを該当するデータベースに対して実行することにより、Campaign システム・テーブルを作成してデータを設定します。

注: eMessage を使用可能にすることを計画している場合は、eMessage システム・テーブルを手動で作成してデータを追加することも必要です (インストーラーによって自動的に行われなかった場合)。詳しくは、34 ページの『eMessage システム・テーブルの作成とデータの設定を手動で行う』を参照してください。

インストール時に「Campaign コンポーネント (Campaign Components)」ページで「Campaign システム表 DDL ファイル」オプションを選択した場合、IBM インストーラーは、Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加するために使用できる一連の SQL スクリプトをインストールします。これらの SQL スクリプトは、Campaign サーバーのインストール済み環境の下の ddl ディレクトリーにインストールされます。システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されている場合は、Campaign インストール済み環境の下の ddl/unicode ディレクトリーに、該当するスクリプトがあります。

SQL スクリプトを使用するには、データベース・クライアントを実行して、Campaign システム・テーブルを格納するデータベースまたはスキーマにスクリプトを適用します。SQL スクリプトの実行方法については、ご使用のデータベース・ソフトウェアの資料を参照してください。

以下の表に、手動で Campaign システム・テーブルを作成してデータを追加するために提供されている SQL スクリプトをリストします。

表 12. Campaign システム・テーブルを作成するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ac_systab_db2.sql
Microsoft SQL Server	ac_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ac_systab_ora.sql

表 13. Campaign システム・テーブルにデータを追加するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ac_populate_tables_db2.sql
Microsoft SQL Server	ac_populate_tables_sqlsvr.sql
Oracle	ac_populate_tables_ora.sql

eMessage システム・テーブルの作成とデータの設定を手動で行う

eMessage の場合、Campaign スキーマに追加のシステム・テーブルを作成し、これらのテーブルに初期データを設定する必要があります。システム・テーブルを自動的に作成するオプションを選択すると、Campaign インストーラーは、Campaign スキーマで eMessage システム・テーブルを自動的に作成し、データを追加します。ただし、オプションを選択しない場合は、eMessage システム・テーブルを手動で作成してデータを追加する必要があります。

データベース・クライアントを使用して、Campaign データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

eMessage テーブルを作成するスクリプト

IBM では、ローカル環境に eMessage テーブルを作成する ace_op_systab スクリプトを提供しています。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されている場合は、eMessage インストール済み環境の ddl/unicode ディレクトリーにある適切なスクリプトを見つけます。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されていない場合は、eMessage インストール済み環境の ddl ディレクトリーにある非 Unicode 用のスクリプトを使用します。使用する必要のあるスクリプトを調べるには、次の表をご利用ください。

表 14. eMessage テーブルを作成するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ace_op_systab_db2.sql システム・テーブルが置かれるユーザー・テーブル・スペースおよびシステム一時テーブル・スペースには、それぞれ 16K 以上のページ・サイズが必要です。
Microsoft SQL Server	ace_op_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ace_op_systab_ora.sql

eMessage テーブルにデータを追加するスクリプト

IBM では、ローカル環境で eMessage テーブルにデータを追加する `ace_op_populate_systab` スクリプトを提供しています。

データ追加用スクリプトは、eMessage インストール済み環境の `ddl` ディレクトリに格納されています。IBM で用意しているデータ追加用スクリプトのバージョンは 1 つだけです。これらのスクリプトは、Unicode テーブルまたは非 Unicode テーブルのいずれにも使用できます。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

使用する必要のあるスクリプトを調べるには、次の表をご利用ください。

表 15. eMessage テーブルにデータを追加するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	<code>ace_op_populate_systab_db2.sql</code>
Microsoft SQL Server	<code>ace_op_populate_systab_sqlsvr.sql</code>
Oracle	<code>ace_op_populate_systab_ora.sql</code>

手動での Campaign の登録

インストール・プロセス中に Campaign インストーラーが Marketing Platform システム・テーブルにアクセスできなかった場合は、**configTool** ユーティリティーを実行して手動で登録する必要があります。

configTool ユーティリティーおよび **populateDb** ユーティリティーを使用すると、Campaign の情報を Marketing Platform システム・テーブルにインポートして取り込むことができます。

1. 以下のコマンド例をガイドラインとして、**populateDb** ユーティリティーを実行します。

```
populateDb.bat -n Campaign
```

このコマンドにより、セキュリティの役割と権限がデフォルト・パーティションにインポートされます。

2. **Campaign** をアップグレードする場合、以下のコマンドを使用して Campaign を登録抹消します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|about" -f exportedAbout.xml
```

このコマンドにより、Campaign の「バージョン情報」ノードが `exportedAbout.xml` ファイルにエクスポートされます。

3. 以下のコマンド例をガイドラインとして使用して、**configTool** ユーティリティーを実行します。

- `configTool -r Campaign -f "full_path_to_Campaign_installation_directory%conf% campaign_configuration.xml"`
- `configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|settingsMenu" -f "full_path_to_Campaign_installation_directory%conf% campaign_setup_navigation.xml"`
- `configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|mainMenu" -f "full_path_to_Campaign_installation_directory%conf% campaign_navigation.xml"`
- `configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|mainMenu|Analytics" -f "full_path_to_Campaign_installation_directory%conf% campaign_analysis_navigation.xml"`
- `configTool -v -i -p "Affinium|suite|uiNavigation|alerts" -f "full_path_to_Campaign_installation_directory%conf% campaign_alerts.xml"`

これらのコマンドにより、構成プロパティーとメニュー項目がインポートされます。存在するファイル数と同じ回数、このユーティリティーを実行する必要があります。

4. Campaign を登録した後、次のコマンドを実行します。

```
configtool -i -p "Affinium|Campaign" -f exportedAbout.xml
```

このコマンドにより、Campaign の「バージョン情報」ノードが exportedAbout.xml ファイルにインポートされます。

手動での eMessage の登録

インストール・プロセス中に eMessage インストーラーが Marketing Platform システム・テーブルにアクセスできなかった場合は、**configTool** ユーティリティーを実行して手動で登録する必要があります。

デフォルトでは、Campaign インストーラーは eMessage を Marketing Platform システム・テーブルに自動的に登録します。ただし、eMessage は使用可能化されません。場合によっては、Campaign インストーラーが自動的に eMessage を登録する際に Marketing Platform システム・テーブルに接続しない場合があります。

インストーラーが eMessage を自動的に登録しない場合は、IBM EMM インストールに付属の configTool ユーティリティーを使用して、手動で eMessage を登録する必要があります。configTool ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools%bin ディレクトリーにあります。

eMessage を手動で登録するには、次のコマンドを使用して configTool ユーティリティーを実行します。

```
configTool -r eMessage -f "full_path_to_eMessage_installation_directory %conf%emessage_configuration.xml"
```

eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign インストール・ディレクトリーのサブディレクトリーです。

eMessage の登録および構成について詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

Campaign 始動スクリプトにおけるデータ・ソース変数の設定 (UNIX のみ)

データ・ソース変数は、Campaign のインストール中にインストーラーによって自動的に設定されます。これらの設定値は、`setenv.sh` ファイルの中で変更できます。`setenv.sh` ファイルを変更した場合は、毎回、サーバーを再始動する必要があります。

Campaign のインストール中に、IBM インストーラーはデータベース情報を収集し、その情報を使用して、Campaign システム・テーブルの作成と使用に必要なデータベースおよび環境変数を自動的に構成します。それらの設定は、Campaign サーバー・インストール済み環境下の `bin` ディレクトリー内にある `setenv.sh` ファイルに格納されます。

システム・テーブルと同じタイプのデータベースを使用しないデータ・ソース (Campaign 顧客テーブルなど) に対するアクセスについては、『データベース環境変数およびライブラリー環境変数』に示されているデータベース環境変数とライブラリー環境変数を追加するために `setenv.sh` ファイルを手動で構成する必要があります。

なお、Campaign サーバーが既に実行中のときにこのファイルを変更する場合は、同サーバーを再始動した後でないと `setenv` ファイルの変更が認識されない点に注意してください。詳しくは、46 ページの『Campaign サーバーの始動』を参照してください。

`setenv` ファイルに追加する必要がある情報については、Distributed Marketing データベース情報ワークシートを参照してください。

データベース環境変数およびライブラリー環境変数

データベース (インストール時に「手動データベース・セットアップ」を選択した場合は、顧客テーブルとシステム・テーブル) およびオペレーティング・システムに必要なデータベース環境変数とライブラリーの環境変数を設定します。データベース変数とライブラリー変数は、`setenv.sh` ファイルで設定できます。

次の表に、データベース名と、その構文および説明を記載します。

表 16. データベース環境変数

データベース	構文および説明
DB2	<p>DB2DIR=<i>full_dir_path</i></p> <p>export DB2DIR</p> <p>DB2 インストール・ディレクトリー (例: /usr/lpp/db2_06_01)</p> <p><i>. full_path_to_db2profile</i></p> <p>DB2 ユーザーにデータベース構成を提供 (例: /home/db2inst1/sqllib/db2profile)。</p> <p>「.」(ピリオドの後にスペース) に注意。</p>
Netezza [®]	<p>NZ_ODBC_INI_PATH=<i>full_dir_path</i></p> <p>export NZ_ODBC_INI_PATH</p> <p>odbc.ini ファイルのディレクトリーの場所</p> <p>(例えば、/opt/odbc64v51)</p> <p>ODBCINI=<i>full_path_and_file_name</i></p> <p>export ODBCINI</p> <p>odbc.ini ファイルへの絶対パス</p>
Oracle	<p>ORACLE_BASE=<i>full_dir_path</i></p> <p>export ORACLE_BASE</p> <p>Oracle インストール・ディレクトリー</p> <p>ORACLE_HOME=<i>full_dir_path</i></p> <p>export ORACLE_HOME</p> <p>Oracle のホーム・ディレクトリー (例えば、/home/oracle/OraHome1)</p>
Teradata	<p>ODBCINI=<i>full_path_and_file_name</i></p> <p>export ODBCINI</p> <p>odbc.ini ファイルへの絶対パス</p>

ライブラリー環境変数は、次の表に記載されているとおり、UNIX オペレーティング・システムの種類に応じて定義します。

表 17. ライブラリー環境変数

オペレーティング・システム	値
SunOS および Linux	<p>LD_LIBRARY_PATH</p> <p>以下に例を示します。</p> <pre>LD_LIBRARY_PATH=<Campaign_Home>/bin:<DB lib ディレクトリーへのパス>:\$LD_LIBRARY_PATH</pre> <p>export LD_LIBRARY_PATH</p> <p>注: LD_LIBRARY_PATH_64 (64 ビット・リンク用) が設定されている場合、削除してください。LD_LIBRARY_PATH_64 の設定時は、LD_LIBRARY_PATH 変数が無視されます。</p>
AIX®	<p>LIBPATH</p> <p>例: LIBPATH=<Campaign_Home>/bin:<DB lib ディレクトリーへのパス>:/usr/lib:\$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/lib</p>
HP-UX	<p>SHLIB_PATH</p> <p>例: SHLIB_PATH=<Campaign_Home>/bin:<DB lib ディレクトリーへのパス>:/usr/lib:\$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/lib</p>

Oracle データベースのライブラリー・ディレクトリー

Oracle のバージョンに応じて、lib ディレクトリーの命名規則が異なります。比較的古いバージョンの場合、32 ビットでは lib、64 ビットでは lib64 を使用します。比較的新しいバージョンの場合、32 ビットでは lib32、64 ビットでは lib を使用します。

32 ビットの Campaign をインストールする場合、\$ORACLE_HOME/lib32 または \$ORACLE_HOME/lib のいずれか一方、つまり 32 ビットの Oracle ライブラリーが入っているものを含めてください。

64 ビットの Campaign をインストールする場合、\$ORACLE_HOME/lib または \$ORACLE_HOME/lib64 のいずれか一方、つまり 64 ビットの Oracle ライブラリーが入っているものを含めてください。

注: 32 ビットと 64 ビットの両方のライブラリーへのパスを含めないでください。ご使用の Campaign のバージョンに合わせて使用するライブラリーへのパスのみを含めてください。

第 6 章 Campaign Web アプリケーションの配置

Campaign Web アプリケーションを配置するには、EAR ファイルを使用するか、個々の WAR ファイルを配置します。

Campaign を配置するには、このセクションのガイドラインに従ってから、Campaign サーバーを始動してください。

IBM インストーラーを実行したときに、Campaign を EAR ファイルに含めたか、または Campaign WAR ファイルを配置するように選択した可能性があります。Marketing Platform または他の製品を EAR ファイルに含めた場合、EAR ファイルに含めた製品の個々のインストール・ガイドに詳しく示されている、配置ガイドラインのすべてに従う必要があります。

Web アプリケーション・サーバーの操作方法を知っている必要があります。管理コンソール内の移動などに関する詳細は、Web アプリケーション・サーバーの文書を参照してください。

Web アプリケーションのセッション・タイムアウトの設定

非アクティブの HTTP セッションがオープン状態を維持できる時間の長さは、セッション・タイムアウトによって決まり、その後、セッションは期限切れになります。必要であれば、WebSphere コンソールまたは WebLogic コンソールを使用してセッション・タイムアウトの値 (秒または分) を調整することにより、Campaign に対する Web アプリケーションのセッション・タイムアウトを設定できます。

Web アプリケーション・サーバーにセッション・タイムアウトを設定するには、次のようにします。

- **WebSphere:** IBM WebSphere Application Server 管理コンソールを使用して、セッション・タイムアウトを分単位で設定します。この設定は、サーバーおよびエンタープライズ・アプリケーション・レベルで調整できます。詳しくは、WebSphere の資料を参照してください。
- **WebLogic:** WebLogic コンソールを使用して、セッション・タイムアウトを秒単位で設定するか、weblogic.xml ファイル内で **session-descriptor** 要素の **TimeoutSecs** パラメーター値を調整します。

WebSphere Application Server への Campaign の配置

サポートされているバージョンの WebSphere Application Server (WAS) 上に、WAR ファイルまたは EAR ファイルから Campaign ランタイム環境を配置できます。

注: WAS で複数言語エンコードが有効になっていることを確認してください。

WAR ファイルから WAS への Campaign の配置

WAR ファイルから WAS に Campaign アプリケーションを配置することができます。

Campaign を配置する前に、以下のタスクを実行してください。

- ご使用の WebSphere のバージョンが、必要なフィックスパックまたはアップグレードも含めて、「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」の資料に記載された要件を満たしていることを確認します。
- WebSphere でデータ・ソースとデータベース・プロバイダーを作成したことを確認します。

Campaign アプリケーションの WAR ファイルを WAS に配置するには、以下の手順を実行します。

1. WebSphere Integrated Solutions Console に移動します。
2. システム・テーブルが DB2 にある場合は、以下の手順に従います。
 - a. 作成したデータ・ソースをクリックします。データ・ソースのカスタム・プロパティに移動します。
 - b. 「カスタム・プロパティ」リンクを選択します。
 - c. 「**resultSetHoldability**」プロパティの値を 1 に設定します。

「**resultSetHoldability**」プロパティが見つからない場合は、
「**resultSetHoldability**」プロパティを作成してその値を 1 に設定します。

3. 「アプリケーション」>「アプリケーション・タイプ」>「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」に移動し、「インストール」をクリックします。
4. 「アプリケーション・インストールの準備」ウィンドウで、「詳細 - すべてのオプションとパラメータを表示 (Detailed - Show all options and parameters)」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。
5. 「続行」をクリックして、「新規アプリケーションのインストール」ウィザードを表示します。
6. 「新規アプリケーションのインストール」ウィザードのウィンドウでは、以下に挙げるウィンドウを除いて、デフォルト設定を受け入れます。
 - 「新規アプリケーションのインストール」ウィザードのステップ 1 では、「**JavaServer Pages ファイルのプリコンパイル**」チェック・ボックスを選択します。
 - インストール・ウィザードのステップ 3 では、「**JDK ソース・レベル**」を 16 に設定します。
 - インストール・ウィザードのステップ 8 では、「**コンテキスト・ルート**」を /Campaign に設定します。
7. WebSphere Integrated Solutions Console の左側のナビゲーション・パネルで、「アプリケーション」>「アプリケーション・タイプ」>「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」にナビゲートします。
8. 「エンタープライズ・アプリケーション」ウィンドウで、Campaign.war ファイルをクリックします。
9. 「Web モジュール・プロパティ」セクションで、「セッション管理」をクリックして、以下のチェック・ボックスを選択します。
 - 「セッション管理のオーバーライド」
 - 「Cookie を使用可能にする」

10. 「Cookie を使用可能にする」をクリックし、「Cookie 名」フィールドに固有の Cookie 名を入力します。
11. バージョン 8 の WebSphere Application Server を使用している場合は、「サーバー」>「WebSphere Application Server」>「サーバー 1」>「セッション管理」>「Cookie を使用可能にする」を選択して、「セッション Cookie を HTTPOnly に設定して、クロスサイト・スクリプティング・アタックを阻止します」チェック・ボックスをクリアします。
12. サーバーの「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」セクションで、配置した WAR ファイルを選択します。
13. 「詳細プロパティ」セクションで、「クラス・ロードおよび更新の検出」を選択します。
14. 「クラス・ローダー順序」セクションで、「最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)」オプションを選択します。
15. 「WAR クラス・ローダーのポリシー (WAR class loader policy)」で、「アプリケーション用の単一のクラス・ローダー (Single class loader for application)」を選択します。
16. 配置を開始します。

EAR ファイルから WAS への Campaign の配置

Campaign が EAR ファイルに含まれたモジュールである場合、Campaign アプリケーションを WAS に配置できます。

IBM EMM インストーラーの実行時に Campaign を EAR ファイルに組み込んだ場合は、EAR ファイルを使用して Campaign を配置できます。

Campaign を配置する前に、以下の点を確認してください。

- ご使用の WebSphere のバージョンが、必要なフィックスパックまたはアップグレードも含めて、「推奨されるソフトウェア環境および最小システム要件」の資料に記載された要件を満たしていることを確認します。
- WebSphere でデータ・ソースとデータベース・プロバイダーを作成したことを確認します。

Campaign を、EAR ファイルから WebSphere Application Server に配置するには、以下の手順を実行します。

1. WebSphere Integrated Solutions Console に移動します。
2. システム・テーブルが DB2 にある場合は、作成したデータ・ソースをクリックします。データ・ソースのカスタム・プロパティに移動します。
3. 「カスタム・プロパティ」リンクを選択します。
4. 「resultSetHoldability」プロパティの値を 1 に設定します。

「resultSetHoldability」プロパティが見つからない場合は、「resultSetHoldability」プロパティを作成してその値を 1 に設定します。

5. 「アプリケーション」>「アプリケーション・タイプ」>「WebSphere エンタープライズ・アプリケーション」に移動し、「インストール」をクリックします。

6. 「アプリケーション・インストールの準備」ウィンドウで、「詳細 - すべてのオプションとパラメータを表示 (Detailed - Show all options and parameters)」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「続行」をクリックして、「新規アプリケーションのインストール」ウィザードを表示します。
8. 「新規アプリケーションのインストール」ウィザードのウィンドウでは、以下に挙げるウィンドウを除いて、デフォルト設定を受け入れます。
 - 「新規アプリケーションのインストール」ウィザードのステップ 1 では、「**JavaServer Pages ファイルのプリコンパイル**」チェック・ボックスを選択します。
 - インストール・ウィザードのステップ 3 では、「**JDK ソース・レベル**」を 16 に設定します。
 - インストール・ウィザードのステップ 8 では、「**コンテキスト・ルート**」を /Campaign に設定します。
9. WebSphere Integrated Solutions Console の左側のナビゲーション・パネルで、「アプリケーション」>「アプリケーション・タイプ」>「**WebSphere エンタープライズ・アプリケーション**」にナビゲートします。
10. 「エンタープライズ・アプリケーション」ウィンドウで、配置する EAR ファイルを選択します。
11. 「**Web モジュール・プロパティ**」セクションで、「**セッション管理**」をクリックして、以下のチェック・ボックスを選択します。
 - 「**セッション管理のオーバーライド**」
 - 「**Cookie を使用可能にする**」
12. 「**Cookie を使用可能にする**」をクリックし、「**Cookie 名**」フィールドに固有の Cookie 名を入力します。
13. バージョン 8 の WebSphere Application Server を使用している場合は、「サーバー」>「**WebSphere Application Server**」>「サーバー 1」>「**セッション管理**」>「**Cookie を使用可能にする**」を選択して、「**セッション Cookie を HTTPOnly に設定して、クロスサイト・スクリプティング・アタックを阻止します**」チェック・ボックスをクリアします。
14. 「**詳細プロパティ**」セクションで、「**クラス・ロードおよび更新の検出**」を選択します。
15. 「**クラス・ローダー順序**」セクションで、「**最初にローカル・クラス・ローダーをロードしたクラス (親は最後)**」オプションを選択します。
16. 「**WAR クラス・ローダーのポリシー (WAR class loader policy)**」で、「**アプリケーション用の単一のクラス・ローダー (Single class loader for application)**」を選択します。
17. 配置を開始します。

WebSphere Application Server バージョン 8 の場合は、「WebSphere Application Server インフォメーション・センターへようこそ」を参照してください。

WebLogic への IBM Campaign の配置

IBM EMM 製品を WebLogic に配置することができます。

Campaign を WebLogic に配置する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

- IBM EMM 製品により、WebLogic で使用される JVM がカスタマイズされます。JVM 関連のエラーが発生した場合に、IBM EMM 製品専用の WebLogic インスタンスを作成しなければならないことがあります。
- 始動スクリプト (startWebLogic.cmd) で JAVA_VENDOR 変数を調べて、使用する WebLogic ドメイン用に選択された SDK が Sun SDK であることを確認します。JAVA_VENDOR=Sun に設定されている必要があります。JAVA_VENDOR=BEA に設定されている場合、JRockit が選択されています。JRockit はサポートされていません。選択された SDK を変更するには、WebLogic の資料を参照してください。
- IBM EMM 製品を Web アプリケーション・モジュールとして配置します。
- UNIX システムの場合、グラフィカルなグラフを正常にレンダリングできるように、コンソールから WebLogic を始動する必要があります。コンソールは通常、サーバーが稼働しているマシンにあります。しかし、Web アプリケーション・サーバーが別の仕方ですべてセットアップされていることもあります。

コンソールがアクセス不能、または存在しない場合は、Exceed を使用してコンソールをエミュレートすることができます。ルート・ウィンドウ・モードまたはシングル・ウィンドウ・モードで UNIX マシンにローカル Xserver プロセスが接続されるように Exceed を構成する必要があります。Exceed を使用して Web アプリケーション・サーバーを始動する場合は、バックグラウンドで Exceed を引き続き実行させて、Web アプリケーション・サーバーが稼働し続けられるようにしてください。グラフのレンダリングで問題が発生した場合は、IBM テクニカル・サポートに連絡して詳細な指示を求めてください。

Telnet または SSH を介して UNIX マシンに接続すると、グラフのレンダリングで必ず問題が発生します。

- IIS プラグインを使用するように WebLogic を構成する場合は、WebLogic の資料を調べてください。
- 実稼働環境で配置を行う場合、JVM メモリー・ヒープ・サイズ・パラメーターを 1024 に設定するために、setDomainEnv スクリプトに以下の行を追加してください。Set MEM_ARGS=-Xms1024m -Xmx1024m -XX:MaxPermSize=256m

WebLogic 11g の場合には、campaign.war ファイルで以下の変更を行います。

1. WL11g で AIX 7.1 も使用する場合は、アンパックした WEB_INF/lib ディレクトリーから xercesImpl.jar ファイルを除去します。
2. campaign.war ファイルをビルドして、war ファイルを配置する前に加えた変更を組み込みます。

レポートを表示するように WebLogic を構成する (UNIX)

Campaign を Contact Optimization と一緒に UNIX システムにインストールした場合、WebLogic Web アプリケーション・サーバーが Contact Optimization レポートにグラフを表示できるようにするには、`java.awt.headless` JVM プロパティを有効にする必要があります。

WebLogic JVM で、最適化レポート内でのグラフ表示を使用可能にするには、以下の手順に従います。

1. WebLogic サーバーが既に稼働中の場合は、シャットダウンします。
2. WebLogic サーバーの起動スクリプト (`startWebLogic.sh`) を見つけて、任意のテキスト・エディターで開きます。
3. `JAVA_OPTIONS` パラメーターを変更して以下の値を追加します。

```
-Djava.awt.headless=true
```

4. 起動スクリプトを保存した後、WebLogic サーバーを再始動します。

Campaign サーバーの始動

Campaign サーバーを始動する際には、Marketing Platform および Campaign Web アプリケーションが配置され、稼働している必要があります。

Campaign サーバーは、直接始動することも、サービスとしてインストールすることもできます。

Campaign サーバーの直接始動

Campaign サーバーを始動するには、Windows の場合は `cmpServer.bat` ファイルを、UNIX の場合は `rc.unica_ac` を実行します。Campaign サーバーがデータの処理と計算を行います。

ご使用のオペレーティング・システムに対応する指示に従ってください。

Windows

Campaign インストール済み環境の `bin` ディレクトリーにある `cmpServer.bat` ファイルを実行することにより、Campaign サーバーを始動します。`unica_aclsnr.exe` プロセスが「Windows タスク マネージャ」の「プロセス」タブに表示されていれば、それはサーバーが正常に始動したことを示しています。

UNIX

`start` 引数を設定した `rc.unica_ac` プログラムを実行することにより、Campaign サーバーを始動します。このコマンドは、`root` として実行する必要があります。以下に例を示します。

```
./rc.unica_ac start
```

`unica_aclsnr` プロセスが正常に開始したかどうかを判別するには、以下のコマンドを実行します。

```
ps -ef | grep unica_aclsnr
```

始動したサーバーのプロセス ID を判別するには、Campaign インストール済み環境の conf ディレクトリーにある unica_aclsnr.pid ファイルを確認します。

Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする方法

Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールし、Windows が開始するときにはいつでも自動的に開始されるようにします。Campaign サーバーは、データを計算して処理します。

Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールするには、以下の手順を実行します。

1. Campaign インストール・ディレクトリーの下にある bin ディレクトリーを、ユーザー PATH 環境変数に追加します。ユーザーの PATH 環境変数がない場合には、作成します。

このパスを、システム PATH 変数ではなく、必ずユーザー PATH 変数に追加するようにしてください。

Campaign bin ディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある場合には、それを削除します。Campaign サーバーをサービスとしてインストールするには、そのディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある必要はありません。

2. サーバーがサービスとしてインストールされている旧バージョンの Campaign からアップグレードする場合には、サービスを停止してください。
3. コマンド・ウィンドウを開き、ディレクトリーを Campaign インストールの下の bin ディレクトリーに変更します。
4. 次のコマンドを実行し、Campaign サーバー・サービスを作成します。
`unica_aclsnr -i`

サービスが作成されます。

注: CAMPAIGN_HOME がシステム環境変数として作成されたことを確認してから、Campaign サーバー・サービスを開始します。

5. 「Unica Campaign リスナー・サービス」プロパティ・ダイアログ・ボックスを開きます。「ログオン」タブをクリックします。
6. 「このアカウント」を選択します。
7. ユーザー名 (システム・ユーザー) およびパスワードを入力して、サービスを開始します。

第 7 章 配置後の Campaign の構成

Campaign を配置した後、Campaign リスナーが実行されていることを確認し、Campaign のシステム・ユーザーをセットアップし、Campaign の構成プロパティを設定し、Campaign のインストールを検査する必要があります。

IBM EMM のレポート機能を使用する場合は、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」で説明されているタスクを完了する必要があります。

注: ホストされた E メールに対して IBM eMessage を使用可能にする予定である場合、標準の eMessage パフォーマンス・レポートを表示するには、IBM EMM レポート作成機能を使用する必要があります。

Campaign リスナーが稼働中であるかどうかの検査

ユーザーがどの Campaign 機能进行操作する場合でも、その前に Campaign リスナーが稼働していなければなりません。リスナーは、ログインごとおよびアクティブ・フローチャートごとに、別個の `unica_acsvr` プロセスを自動で作成します。例えば、あるユーザーがログインしてフローチャートを開くと、リスナーは `unica_acsvr.exe` のインスタンスを 2 つ作成します。

Campaign リスナーが稼働していることを確認するには、以下の手順を使用します。

1. ご使用のオペレーティング・システムに応じた手順を使用してください。

Windows では、「Windows タスク マネージャー」の「プロセス」タブで、`unica_aclsnr.exe` を見つけます。

UNIX では、`ps` コマンド (例えば、`ps -ef | grep unica_aclsnr`) を使用して、Campaign サーバーを見つけます。

2. リスナーが稼働していない場合は、次のようにして再始動します。

Windows の場合は、Campaign インストール済み環境の `bin` ディレクトリーにある、`cmpServer.bat` スクリプトを実行します。

UNIX の場合は、システム・プロンプトでコマンド `rc.unica_ac start` を入力します。

リスナーの自動始動など、リスナーの稼働に関する重要な詳細は、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

Campaign システム・ユーザーをセットアップする

データベースに直接アクセスするための Campaign システム・ユーザーをセットアップします。Campaign に複数のパーティションがある場合は、それぞれのパーティションに対してシステム・ユーザーを作成してください。

システム・ユーザーとは、IBM EMM アプリケーションで使用するよう構成された IBM ユーザー・アカウントです。

ユーザーにログイン資格情報を求めるプロンプトを繰り返し出さないようにするためには、システム・ユーザーを 1 つ以上のデータ・ソースに関連付けることができます。データ・ソースはそれぞれに、ユーザー名およびパスワードを指定します。そのため、データ・ソースを参照することによって、データベースやその他の保護リソースにアクセスするためのユーザー名およびパスワードを提供できます。複数のデータ・ソースをシステム・ユーザー・アカウントの構成に追加することで、そのシステム・ユーザーが複数のデータベースにアクセスできるようにすることができます。

Campaign では、システム・ユーザーが、システム・テーブルやその他のデータ・ソースにアクセスするためのログイン資格情報を保有します。

既存または新規の IBM EMM ユーザー・アカウントを使用して、以下に説明するデータ・ソースに対する資格情報を保存します。

IBM EMM の「**セットアップ**」>「**ユーザー**」領域で、IBM EMM ユーザーをセットアップして、ユーザーにデータ・ソースを割り当てます。その方法についての説明は、オンライン・ヘルプの該当するセクションを参照してください。

以下のデータ・ソースに対する資格情報を保有するユーザー・アカウントをセットアップします。

- Campaign システム・テーブル (UA_SYSTEM_TABLES)
- すべての顧客 (ユーザー) テーブル

UNIX では、システム・ユーザーの「**代替ログイン**」属性に、Campaign の UNIX ユーザーと特権を共有するグループに属するユーザーの UNIX アカウントを入力します。

注: 複数のパーティションがある場合は、パーティションごとに固有のシステム・ユーザーが必要です。複数のパーティションで同じシステム・ユーザーを使用することはできません。

「構成」 ページでデータ・ソース・プロパティを追加する

適切なデータ・ソース・テンプレートを使用して、Campaign のそれぞれのデータ・ソースの「構成」 ページにデータ・ソース・プロパティを追加します。

IBM インストーラーを実行すると、Campaign インストーラーは Marketing Platform データベースに指定されたデータベース・タイプに応じたテンプレートをインポートします。

追加のデータベース・タイプに他のデータ・ソース・テンプレートが必要な場合は、Marketing Platform configTool ユーティリティを使用して、それらのテンプレートを手動でインポートする必要があります。使用するデータベースの各タイプに応じたテンプレートを、必要な数だけインポートできます。

例えば、Marketing Platform および Campaign のインストール済み環境で、以下のデータベースを使用しているとします。

- Oracle - システム・テーブル
- DB2 - 顧客 (ユーザー) テーブル
- DB2 - 追加の顧客 (ユーザー) テーブル

この場合は、2 セットの顧客 (ユーザー) テーブルに対応した DB2Template.xml テンプレートをインポートする必要があります。

Marketing Platform システム・テーブルと Campaign システム・テーブルのデータベースが同じデータベース・タイプである場合、インストーラーは自動的に、これらのシステム・テーブルに使用するテンプレートをインポートします (この例では、Oracle テンプレートをインポートします)。

手順については、『データ・ソース・テンプレートのインポート』を参照してください。

テンプレートから新しいカテゴリを作成すると、新しいデータ・ソース構成プロパティのセットが作成されます。それぞれのタイプのデータ・ソースごとに、必要なだけ新しいカテゴリを作成します。上記の例では、Oracle テンプレートで 1 つの新規カテゴリを作成し、DB2 テンプレートで 2 つの新規カテゴリを作成します。52 ページの『データ・ソース・テンプレートの複製』を参照してください。

データ・ソース・プロパティを追加した後は、テンプレートから作成したカテゴリのデータ・ソース構成プロパティを設定します。

手順については、52 ページの『データ・ソース・プロパティ』を参照してください。

データ・ソース・テンプレートのインポート

Campaign システム・テーブルのデータ・ソース (UA_SYSTEM_TABLES) は、Oracle、DB2、および SQLServer でのみサポートされます。Campaign システム・テーブルをサポートしていないデータベース・タイプをサポートするには、**configTool** ユーティリティを使用してユーザー・テーブル用のデータ・ソース・テンプレートをインポートします。

Campaign データ・ソース・テンプレートは、Campaign インストール済み環境の conf ディレクトリにあります。

テンプレートをインポートおよびエクスポートするには、Marketing Platform configTool ユーティリティを使用します。このユーティリティは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリにあります。configTool について十分に理解していない場合は、このタスクを実行する方法の詳細について、75 ページの『configTool』を参照してください。

以下に、Oracle テンプレートをデフォルト・パーティション (Windows 環境) にインポートする場合に使用するコマンドの一例を示します。

```
configTool -i -p "Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f
full_path_to_directory_containing_your_Oracle_template%OracleTemplate.xml
```


データ・ソース・テンプレートの複製

データ・ソース・カテゴリに新しい構成プロパティのセットを作成するには、データ・ソース・テンプレートを複製します。

1. 「構成」 ページで、複製するデータ・ソース・テンプレートにナビゲートします。

他のカテゴリとは異なり、テンプレート・カテゴリのラベルは斜体になっていて、括弧で囲まれています。

2. データ・ソース・テンプレートをクリックします。

「テンプレートからのカテゴリの作成」 ページが表示されます。

3. 「新しいカテゴリ名」 フィールドに名前を入力します (必須)。

注: Campaign のシステム・テーブルのデータ・ソース・カテゴリ名は、`UA_SYSTEM_TABLES` であることが必須です。

4. 必要に応じて、新しいカテゴリに含まれるプロパティを編集します。また、これを後で行うこともできます。
5. 「保存と終了」 をクリックして、新規の構成を保存します。

新規カテゴリがナビゲーション・ツリーに表示されます。

Campaign 構成プロパティ

Campaign の基本インストールでは、「構成」 ページで構成プロパティを指定する必要があります。また、「構成」 ページを使用すると、重要な機能を実行するプロパティを指定し、オプションとしてそれらの機能を調整することができます。

データ・ソース・プロパティ

次の表に、それぞれの Campaign データ・ソースについて指定する必要があるプロパティに関する情報を記載します。

表 18. それぞれの Campaign データ・ソースについてのプロパティ

Property name	説明
ASMUserForDBCredentials	このプロパティには、49 ページの『Campaign システム・ユーザーをセットアップする』で Campaign システム・ユーザーとして既に作成したユーザーを設定する必要があります。
DSN	SQL サーバーの場合、このプロパティには、作成した DSN (データ・ソース名) を設定します。Oracle および DB2 の場合、このプロパティにはデータベース名または SID (サービス) 名を設定します。
JndiName	このプロパティには、アプリケーション・サーバーに作成した、この特定のデータ・ソースに接続するための JNDI を設定します。

表 18. それぞれの Campaign データ・ソースについてのプロパティ (続き)

Property name	説明
SystemTableSchema	SQL サーバーには不要です。他のデータ・ソースの場合、このプロパティには、接続先とするデータベースのユーザーを設定します。
OwnerForTableDisplay	SQL サーバーには不要です。他のデータ・ソースの場合、このプロパティには、接続先とするデータベースのユーザーを設定します。

データ・ソースは、Campaign システム・テーブル・データベース、および Campaign で使用する予定のすべての顧客 (ユーザー) データベースです。

注: Campaign のシステム・テーブルのデータ・ソース・カテゴリ名は、UA_SYSTEM_TABLES でなければなりません。

値の設定について詳しくは、これらのプロパティのコンテキスト・ヘルプを参照するか、「IBM Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

Campaign の基本インストールでは、データ・ソース・プロパティを作成して設定する他に、「構成」ページに以下のプロパティを設定する必要があります。

- Campaign > unicaACListener > serverHost
- Campaign > unicaACListener > serverPort
- デフォルト・パーティションには、Campaign > partitions > partition1 のカテゴリに、必要に応じた値を設定します。

プロパティを変更した場合は、その変更を有効にするために Campaign リスナーを再始動する必要があります。

Campaign のテーブルをマップする

ユーザー・テーブルのマッピングは、外部データ・ソースを Campaign で利用できるようにするプロセスです。一般に、ユーザー・テーブルには、企業の顧客、見込み顧客、あるいは製品に関する情報が格納されます。データベース表または ASCII フラット・ファイルをデータ・ソースとして使用できます。構成したデータ・ソースのデータをフローチャート内のプロセスで利用できるようにするには、それらのデータ・ソースをすべてマップする必要があります。

ユーザー・テーブルをマップする方法については、「Campaign 管理者ガイド」を参照してください。

注: ユーザー・テーブルは、システム・テーブルとは異なります。大半の Campaign システム・テーブルは、システム・テーブル・データ・ソース名 UA_SYSTEM_TABLES が使用されていれば、初回のインストールと構成のときに自動的にマップされます。接続上の問題によりシステム・テーブルを手動でマップする必要がある場合は、Campaign からログアウトし、テーブルをマップしてから、再びログインしてください。

Campaign のインストールの検証

Campaign をインストールおよび構成するためのすべてのステップを実行し終えたら、Campaign Web アプリケーションを配置して、それが終わった後に Campaign を構成します。これで、インストールを検査する準備が整います。

Campaign 管理者役割 (asm_admin など) に既に存在するユーザーとして IBM EMM にログインします (まだこれを行っていない場合)。「設定」>「ユーザー」で、新規ユーザーに少なくとも 1 つのセキュリティーの役割 (例えば、グローバル・ポリシー/管理) を割り当てます。新規ユーザーに役割を割り当てた後、その新規ユーザーとして Campaign にログインできます。

インストール済み環境を確認するには、次の手順に従ってください。

1. IBM EMM にログインします。
2. 「設定」>「キャンペーン設定」>「テーブル・マッピングの管理」ウィンドウで、すべてのシステム・テーブルがあることを確認します。
3. キャンペーンを作成し、そのキャンペーンにフローチャートを作成します。

IBM EMM 製品との統合のためのプロパティの設定

Campaign は、さまざまな IBM アプリケーションを統合します。必要であれば、Campaign とその他の IBM 製品との統合をセットアップするための構成プロパティを指定できます。

Campaign とその他の IBM 製品との統合に関する情報を記載している資料のリストを表示するには、8 ページの『IBM Campaign の資料のロードマップ』を参照してください。

第 8 章 Campaign での複数のパーティションの構成

IBM EMM アプリケーションを Campaign と一緒に操作する場合、アプリケーションを構成できるのは、Campaign インスタンスが構成されているパーティションです。各パーティション内のアプリケーション・ユーザーは、同じパーティション内の Campaign 用に構成されている Campaign 機能、データ、顧客テーブルにアクセスできます。

パーティションの利点

複数パーティションは、ユーザーのグループ間に強力なセキュリティーを設定する場合に便利です。各パーティションには、独自の Campaign システム・テーブルのセットがあるためです。複数パーティションは、複数のユーザー・グループ間でデータを共有したい場合には使用できません。

各パーティションには、独自の構成設定があり、ユーザーのグループごとに Campaign をカスタマイズできます。ただし、すべてのパーティションは同じインストール・バイナリーを共有します。すべてのパーティションで同じバイナリーを共有していれば、複数パーティションのインストールやアップグレードに要する労力を最小限にすることができます。

パーティションのユーザー割り当て

パーティションへのアクセスは、Marketing Platform グループのメンバーシップによって管理されます。

パーティションのスーパーユーザー (platform_admin) を除き、各 IBM ユーザーは、1 つのパーティションに属することができます。複数のパーティションへのアクセスが必要なユーザーは、パーティションごとに個別の IBM ユーザー・アカウントが必要です。

Campaign パーティションが 1 つしかない場合、Campaign に対するアクセス権限を持たせるために、ユーザーをそのパーティションに明示的に割り当てる必要はありません。

パーティションのデータ・アクセス

複数のパーティションを使用した構成では、パーティションに以下のセキュリティー特性が備わります。

- パーティションに割り当てられているグループのメンバー以外のユーザーは、そのパーティションにアクセスできない。
- あるパーティションのユーザーは、別のパーティションのデータを参照したり変更したりすることができない。
- ユーザーは Campaign の参照ダイアログ・ボックスから、割り当てられているパーティションのルート・ディレクトリーより上の Campaign ファイル・システムにはナビゲートできない。例えば、partition1 と partition2 という名前の 2 つのパーティションがあり、ユーザーが partition1 に関連付けられたグループに属し

ているとします。この場合、このユーザーは、ダイアログ・ボックスから partition2 のディレクトリー構造をナビゲートすることはできません。

パーティション・スーパーユーザー

Marketing Platform のユーザー全体でセキュリティーを管理するには、システム内のすべてのセキュリティー設定およびユーザー・アカウントにアクセスできるユーザー・アカウントが存在していなければなりません。

デフォルトでは、このユーザー・アカウントは platform_admin です。このユーザー・アカウントは、特定の 1 つのパーティションには属さず、すべてのパーティション内のすべてのユーザー・アカウントにアクセスできます。

IBM 管理者は、同じアクセス・レベルを持つ追加ユーザーを作成できます。パーティション・スーパーユーザーになるためには、アカウントが Marketing Platform に対する管理アクセス権限を持ち、「ユーザー」、「ユーザー・グループ」、および「ユーザーの権限」ページに対するフルアクセス権限を持つ必要があります。パーティション・スーパーユーザーには、製品固有のセキュリティー・ページ (Campaign セキュリティー・ページなど) に対するアクセス権限は不要です。

複数のパーティションのセットアップ

Campaign に複数のパーティションを構成することにより、Campaign の異なるユーザーのグループごとにデータを分離して保護することができます。各パーティションはそれぞれ固有の構成プロパティのセットを持つため、ユーザーのグループごとに Campaign をカスタマイズできます。

Campaign に追加のパーティションを構成する前に、構成するパーティションごとに以下のタスクを実行します。

1. Campaign システム・テーブルのデータベースまたはスキーマを作成する
2. ODBC 接続またはネイティブ接続を作成します
3. Web アプリケーション・サーバーに JDBC 接続を作成する

Campaign に複数のパーティションをセットアップするには、以下のタスクを実行します。

1. システム・テーブル・データベース、およびパーティションに必要な他のすべてのデータ・ソースを作成します。その後、データ・ソースにアクセスするために必要な JDBC および ODBC 接続またはネイティブ接続を構成します。
2. パーティションごとに、システム・テーブルを格納するための異なるスキーマをデータベースに作成します。システム・テーブルを作成してデータを追加するには、Campaign に同梱されているデータベース固有のスクリプトを使用します。
3. 追加のパーティションごとに、ディレクトリー構造を作成する以下のタスクを実行します。

注: バックアップにする目的で、元の partition1 ディレクトリーのクリーン・コピーを保存してください。

- a. Campaign インストール済み環境の partitions ディレクトリーで、追加するパーティションごとに、すべてのサブディレクトリーが含まれるようにデフォルト partition1 ディレクトリーの複製を作成します。
 - b. 各パーティション・ディレクトリーに一意の名前を付けます。後で「構成」ページでパーティションの構成ツリーを作成するときには、ここで設定する名前と完全に同じ名前をパーティションに使用します。2 番目のパーティションを作成するために Campaign/partitions/partition2 という名前のディレクトリーを作成した場合、「構成」ページで構成ツリーを作成するときに、名前「partition2」を使用してこのパーティションを識別しなければなりません。
 - c. 複製パーティション・サブディレクトリー内に存在するすべてのファイルを削除します。
4. **-s** オプションを指定した **partitionTool** ユーティリティーを使用してデフォルト・パーティションを複製するために、以下のタスクを実行します。

注: このオプションを使用しない場合は、この手順を実行する前に、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを停止する必要があります。

- a. JAVA_HOME 環境変数を、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトに設定するか、または partitionTool ユーティリティーを実行するコマンド・ライン・ウィンドウで設定します。
- b. コマンド・ライン・ウィンドウを開き、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーからユーティリティーを実行します。適切なコマンドおよびオプション（「Marketing Platform 管理者ガイド」で説明）を使用して、目的の結果を達成します。 **partitionTool -c -s partition1 -n partition2**
- c. 作成する必要がある新しいパーティションごとに、この手順を繰り返します。
- d. 完了したら、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを停止して再始動し、作成されたグループを確認します。

注: このユーティリティーの使用方法について詳しくは、83 ページの『partitionTool』を参照してください。

5. 新規パーティションごとに New partitionTemplate を使用して「構成」ページにパーティション構造を作成するために、以下のタスクを実行します。
 - a. 「構成」ページで、「キャンペーン」>「パーティション」にナビゲートして、(partitionTemplate) をクリックします。

リストに (partitionTemplate) プロパティーが表示されていない場合には、configTool ユーティリティーで以下のようなコマンドを使用して、パーティション・テンプレートをインポートしてください。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions"
-f <CAMPAIGN_HOME>/conf/partitionTemplate.xml
```

CAMPAIGN_HOME は、Campaign インストール済み環境への実際のパスで置き換えます。

configTool ユーティリティーは、IBM Marketing Platform インストール済み環境の tools ディレクトリーにあります。このユーティリティーについては、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。右側のペインに、「**新しいカテゴリー名**」フィールドが空の状態です。「partitionTemplate」ペインが表示されます。

- b. 新しいパーティションの名前を入力します。この名前には、56 ページの『複数のパーティションのセットアップ』でファイル・システムにパーティションのディレクトリーを作成したときと同じ名前を使用します。
- c. 「**変更の保存**」をクリックします。パーティション・テンプレートと同じカテゴリーとプロパティーを持つ新しいパーティション構造が表示されます。

パーティションのデータ・ソース・プロパティーの構成

作成するそれぞれのパーティションについて、データ・ソース・プロパティーを構成する必要があります。適切なデータ・ソース・テンプレートを使用して、データ・ソース・プロパティーを作成します。

IBM インストーラーを実行すると、Campaign インストーラーは Marketing Platform データベースに指定されたデータベース・タイプに応じたテンプレートをインポートします。

追加のデータベース・タイプに他のデータ・ソース・テンプレートが必要な場合は、Marketing Platform **configTool** ユーティリティーを使用して、それらのテンプレートを手動でインポートする必要があります。使用するデータベースの各タイプに応じたテンプレートを必要な数だけインポートできます。

例えば、Marketing Platform および Campaign のインストール済み環境で、以下のデータベースを使用しているとします。

- Oracle - システム・テーブル
- DB2 - 顧客 (ユーザー) テーブル
- DB2 - 追加の顧客 (ユーザー) テーブル

この場合は、2 セットの顧客 (ユーザー) テーブルに対応した DB2Template.xml テンプレートをインポートする必要があります。

Marketing Platform システム・テーブルと Campaign システム・テーブルのデータベースが同じデータベース・タイプである場合、インストーラーは自動的に、これらのシステム・テーブルに使用するテンプレートをインポートします (この例では、Oracle テンプレートをインポートします)。

注: 新規パーティションを作成する場合、**configTool** ユーティリティーを使用して、システム・テーブルおよびユーザー・テーブル用にデータ・ソース・テンプレートをインポートする必要があります。

手順については、51 ページの『データ・ソース・テンプレートのインポート』を参照してください。

テンプレートから新しいカテゴリーを作成すると、新しいデータ・ソース構成プロパティーのセットが作成されます。それぞれのタイプのデータ・ソースごとに、必要なだけ新しいカテゴリーを作成します。上記の例では、Oracle テンプレートで 1

つの新規カテゴリを作成し、DB2 テンプレートで 2 つの新規カテゴリを作成します。52 ページの『データ・ソース・テンプレートの複製』を参照してください。

データ・ソース・プロパティを追加した後は、テンプレートから作成したカテゴリのデータ・ソース構成プロパティを設定します。

手順については、52 ページの『Campaign 構成プロパティ』を参照してください。

各パーティションのデータ・ソース・プロパティを構成するために、以下のタスクを実行します。

1. 適切なデータ・ソース・テンプレートを使用して、Campaign のそれぞれのデータ・ソースの「構成」ページにデータ・ソース構成プロパティを追加します。IBM インストーラーを実行すると、Campaign インストーラーは Marketing Platform データベースに指定されたデータベース・タイプに応じたテンプレートをインポートします。追加のデータベース・タイプに他のデータ・ソース・テンプレートが必要な場合は、Marketing Platform configTool ユーティリティを使用して、それらのテンプレートを手動でインポートする必要があります。使用するデータベースの各タイプに応じたテンプレートを、必要な数だけインポートできます。例えば、Marketing Platform および Campaign のインストール済み環境で、以下のデータベースを使用しているとします。

- Oracle - システム・テーブル
- DB2 - 顧客 (ユーザー) テーブル
- DB2 - 追加の顧客 (ユーザー) テーブル

この場合は、2 セットの顧客 (ユーザー) テーブルに対応した DB2Template.xml テンプレートをインポートする必要があります。Marketing Platform システム・テーブルと Campaign システム・テーブルのデータベースが同じデータベース・タイプである場合、インストーラーは自動的に、これらのシステム・テーブルに使用するテンプレートをインポートします (この例では、Oracle テンプレートをインポートします)。手順については、51 ページの『データ・ソース・テンプレートのインポート』を参照してください。

2. テンプレートから新しいカテゴリを作成します。これにより、新しいデータ・ソース構成プロパティのセットが作成されます。それぞれのタイプのデータ・ソースごとに、必要なだけ新しいカテゴリを作成します。上記の例では、Oracle テンプレートで 1 つの新規カテゴリを作成し、DB2 テンプレートで 2 つの新規カテゴリを作成します。52 ページの『データ・ソース・テンプレートの複製』を参照してください。
3. Campaign のそれぞれのデータ・ソースについて、データ・ソース構成プロパティを設定します。詳細については、52 ページの『Campaign 構成プロパティ』を参照してください。

Campaign のシステム・ユーザーのセットアップ

システム・ユーザーに 1 つ以上の Marketing Platform データ・ソースを関連付けることにより、ユーザーにログイン資格情報を求めるプロンプトを繰り返し出さないようにできます。データ・ソースはそれぞれに、ユーザー名およびパスワードを指定します。データ・ソースを参照することにより、データベースまたはその他の保

護りソースにアクセスするためのユーザー名とパスワードを提供できます。複数のデータ・ソースをシステム・ユーザー・アカウントの構成に追加することで、そのシステム・ユーザーが複数のデータベースにアクセスできるようにすることができます。

IBM EMM アプリケーションは、以下の属性を使用して構成されたシステム・ユーザー・アカウントを必要とする場合があります。

- システム・テーブルやその他のデータ・ソースにアクセスするためのログイン資格情報。
- システム内でオブジェクトを作成、変更、および削除するための特定の権限。

新規ユーザーのセットアップおよびユーザーへのデータ・ソースの割り当てについて詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Campaign のシステム・ユーザーをセットアップするには、以下の操作を実行します。

1. 既存または新規のユーザー・アカウントを使用して、以下のデータ・ソースに対する資格情報を保存します。
 - Campaign システム・テーブル
 - すべての顧客 (ユーザー) テーブル
2. UNIX では、システム・ユーザーの「代替ログイン」属性に、Campaign の UNIX ユーザーと特権を共有するグループに属するユーザーの UNIX 名を入力します。

注: 複数のパーティションがある場合は、それぞれのパーティションに対してシステム・ユーザーを作成する必要があります。

複数のパーティションがある場合の IBM Cognos レポートの使用

IBM Cognos レポートを、Campaign、eMessage、または Interact の複数のパーティションで使用するには、IBM Cognos のレポート・パッケージをパーティションごとに構成する必要があります。

手順については、「*IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド*」を参照してください。

パーティションへの役割、権限、およびグループの割り当て

Campaign 用に構成したパーティションを使用するには、その前に各パーティション内の管理者の役割を持つユーザーに役割を割り当てる必要があります。さらに、各パーティションにグループを割り当てる必要もあります。

partitionTool ユーティリティーを使用して、作成する各パーティションにデフォルトの管理ユーザーを作成してください。

各パーティションの管理ユーザーに役割を割り当てる - partitionTool ユーティリティーは、作成するパーティションごとに、デフォルトの管理ユーザーを作成します。「ユーザー」ページで、新規ユーザーに少なくとも 1 つのセキュリティの役

割 (例えば、グローバル・ポリシー/管理) を割り当てます。新規ユーザーに役割を割り当てた後、その新規ユーザーとして Campaign パーティションにログインできます。

複数の Campaign パーティションで IBM eMessage を使用可能にする予定の場合は、Campaign パーティションごとに対応する eMessage パーティションを構成する必要があります。eMessage の追加パーティションの作成については、63 ページの『第 9 章 eMessage での複数のパーティションの構成』を参照してください。

第 9 章 eMessage での複数のパーティションの構成

eMessage に複数のパーティションを構成することにより、eMessage の異なるユーザーのグループごとにデータを分離して保護することができます。各パーティションはそれぞれ固有の構成プロパティのセットを持つため、ユーザーのグループごとに eMessage をカスタマイズできます。

eMessage をインストールすると、Marketing Platform に eMessage のデフォルト・パーティションが作成されます。eMessage の追加のパーティションを構成できます。eMessage に作成する各パーティションは、Campaign に作成されたパーティションと連動します。

注: eMessage に複数のパーティションを構成するには、それぞれに対応するパーティションを Campaign に構成する必要があります。

eMessage に新しいパーティションを追加するには、eMessage および Campaign の Marketing Platform 構成に変更を加える必要があります。

重要: eMessage および Campaign の構成を変更したら、Campaign をホストする Web アプリケーション・サーバーを再始動し、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を再始動する必要があります。Campaign リスナーを再始動しなければならない場合もあります。

変更を加える前に、既存の構成をバックアップしておいてください。

eMessage のパーティション: 概要

eMessage のパーティションを作成することで、異なるユーザーのグループごとにデータを分離して保護できます。各パーティションは、eMessage の個別のインスタンスとしてユーザーに表示されます。同じシステムに他のパーティションが存在することを示すものはありません。各パーティションは、それぞれに固有の構成プロパティのセットを持つため、ユーザーのグループごとに eMessage をカスタマイズできます。

各パーティション内のユーザーは、そのパーティションに構成されている機能、データ、および顧客テーブルにのみアクセスすることができます。例えば、partition1 および partition2 という名前のパーティションを作成した場合、partition1 内で作業している eMessage ユーザーは、partition1 内に構成されている顧客テーブルから E メール受信者を選択することはできますが、partition2 内に構成されている E メール受信者を選択することはできません。IBM は、ユーザーがデータを共有する必要がある場合には、複数のパーティションを作成することを推奨していません。

複数のパーティションで作業する場合は、eMessage のパーティションに固有の特性、および eMessage のパーティションが Campaign のパーティションにどのように関係するかを理解する必要があります。また、eMessage の複数のパーティションを作成して構成する際のワークフローを十分に理解する必要があります。

eMessage のパーティションの特性

eMessage に新しいパーティションを作成して構成するときには、以下の点に注意してください。

- eMessage のパーティションを作成する方法は、Campaign のパーティションを作成する方法とは異なります。

eMessage に新しいパーティションを作成するには、Marketing Platform の eMessage 構成プロパティで使用可能なパーティション・テンプレートを使用します。

- 各 eMessage パーティションの名前は、対応する Campaign パーティションの名前と完全に一致している必要があります。
- eMessage に作成する各パーティションは、IBM EMM Hosted Services に接続可能でなければなりません。

パーティションごとに個別の IBM EMM Hosted Services アカウントを要求する必要があります。アカウントに関連付けられたユーザー名とパスワードが、IBM から提供されます。eMessage が IBM EMM Hosted Services に接続する際に、これらのアクセス資格情報を自動的に提供できる Marketing Platform データ・ソースを構成する必要があります。

アカウントの要求方法について詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

Campaign のパーティションとの関係

eMessage の各パーティションは、Marketing Platform で Campaign に対して作成された特定のパーティションと連動します。Campaign パーティションは、以下を提供します。

- eMessage システム・テーブルを格納する Campaign スキーマ
- パーティション内の Campaign のファイル構造。これには、eMessage が受信者リストを作成および処理するために使用するディレクトリーも含まれます。
- パーティション内での受信者リストの作成、および eMessage の使用可能化に関連する構成プロパティ

eMessage は、特定のパーティション内の Campaign と連動するため、eMessage と Campaign のパーティション構造が同じ名前を指定していなければなりません。パーティション名は、完全に一致する必要があります。

eMessage に複数のパーティションを構成するためのロードマップ

eMessage にパーティションを作成するには、Marketing Platform 構成の中に存在する Campaign 内のパーティションと正確に同じ名前を使用します。

eMessage 用の新規パーティションを作成する前に、Campaign および eMessage 内のパーティションに関する eMessage のすべての前提条件を満たしていることを確認する必要があります。

eMessage の新規パーティションを作成するには、以下の手順に従います。

1. 『eMessage の新しいパーティションを作成する』
2. 67 ページの『パーティションの eMessage システム・テーブルを準備する』
3. 69 ページの『IBM EMM Hosted Services にアクセスするシステム・ユーザーの構成』
4. 70 ページの『新規パーティションに対応する Campaign で eMessage を使用可能にする』
5. 70 ページの『eMessage の受信者リスト・アップローダーの場所の指定』
6. 71 ページの『eMessage を構成した後のシステム・コンポーネントの再始動』
7. 71 ページの『eMessage パーティションの構成および接続をテストする』

eMessage の新しいパーティションを作成する

eMessage をインストールすると、Marketing Platform に eMessage のデフォルト・パーティションが作成されます。 eMessage のために複数のパーティションを作成することにより、異なるユーザーのグループごとにデータを分離して保護することができます。

eMessage のパーティションを作成して構成する前に、eMessage および Campaign の以下の要件を満たす必要があります。

- eMessage に複数のパーティションを作成する前に、eMessage に関する以下の作業を完了してください。
 - IBM サポートに連絡して、各パーティションのアカウントと資格情報を要求します。パーティションごとに別個の IBM EMM Hosted Services アカウントとアクセス権限の資格情報が必要です。詳しくは、「*IBM 起動および管理者ガイド*」を参照してください。
 - パーティションの Campaign スキーマに作成する予定の eMessage システム・テーブルにアクセス可能なシステム・ユーザーを作成します。

Campaign パーティション用に作成したシステム・ユーザーを更新して、そのユーザーも eMessage システム・テーブルにアクセスできるようにすることが可能です。

- eMessage に複数のパーティションを作成する前に、Campaign で以下の作業を完了してください。
 - eMessage 用に作成するパーティションと連動するパーティションを Campaign に作成します。パーティションの名前を記録します。
 - Campaign パーティション内に Campaign システム・テーブルを作成します。
 - パーティション内のシステム・テーブルにアクセスするシステム・ユーザーを構成します。

複数のパーティションがある場合は、パーティションごとに固有のシステム・ユーザーが必要です。複数のパーティションで同じシステム・ユーザーを使用することはできません。

IBM インストーラーは、初期インストール時に eMessage 構成プロパティーとデフォルト・パーティションを登録します。デフォルト・パーティションには、追加パーティションを作成するためにコピーできるテンプレートが組み込まれています。

eMessage の新規パーティションを作成するには、以下の操作を実行します。

1. 「eMessage」 > 「partitions」 > 「(partition)」にナビゲートして、パーティション・テンプレートを複製します。
2. 新しいパーティションに名前を付けます。

注: eMessage では、作成後のパーティションの削除をサポートしていません。

パーティション・テンプレートの識別

「構成」 ページでは、デフォルト・パーティションのナビゲーション・ツリーに eMessage パーティション・テンプレートが表示されます。ツリー内でパーティション・テンプレートを識別できるように、パーティション・テンプレートのラベルは括弧で囲まれた斜体となっています。

新規パーティションの命名

新しいパーティションに名前を付ける際には、以下の制約が適用されます。

- 名前は、ツリー内で兄弟となっているカテゴリ (つまり、同じ親カテゴリを共有するカテゴリ) の間で一意でなければなりません。
- パーティション名をピリオドで開始することはできません。さらに、パーティション名に以下の文字を使用することはできません。

!	^
"	<
+	>
#	=
\$?
%	@
&	[
(]
)	{
*	}
+	\
:	/
;	
'	`
	~

注: eMessage は特定のパーティション内の Campaign と連動するため、eMessage と Campaign のパーティションは同じパーティション名を指定していなければなりません。

パーティションの eMessage システム・テーブルを準備する

eMessage に作成するパーティションごとに、そのパーティションが Campaign スキーマ内で使用する eMessage システム・テーブルを作成してデータを追加し、構成する必要があります。

パーティション用の eMessage システム・テーブルを準備するには、以下の操作を実行します。

1. eMessage システム・テーブルを作成します。 データベース・クライアントで、システム・テーブルを作成する SQL スクリプトを Campaign データベースに対して実行します。
2. 作成したテーブルにデータを追加します。 データベース・クライアントを使用して、テーブルにデータを追加するスクリプトを Campaign データベースに対して実行します。SQL スクリプトについて詳しくは、34 ページの『eMessage システム・テーブルの作成とデータの設定を手動で行う』の参照表でスクリプト名および場所を確認してください。
3. eMessage 構成で、パーティションに以下の構成プロパティを設定し、パーティションの Campaign システム・ユーザーに対して構成したユーザー名およびプラットフォーム・データ・ソースを指定します。

- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > asmUserForDBCredentials
- eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > amDataSourceForDBCredentials

eMessage は、Marketing Platform で構成されたシステム・ユーザーを使用して、パーティションのシステム・テーブルにアクセスします。このシステム・ユーザーに追加された Marketing Platform データ・ソースが、必要なアクセス資格情報を提供します。eMessage システム・テーブルはパーティションの Campaign スキーマ内に存在するため、Campaign スキーマにアクセスするために作成したシステム・ユーザーを使用して、パーティションの eMessage システム・テーブルにアクセスすることができます。

4. パーティションの構成プロパティで以下のプロパティを更新します。
 - eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > type
 - eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > schemaName
 - eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > jdbcBatchSize
 - eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > jdbcClassName
 - eMessage > partitions > partition [n] < dataSources > systemTables > jdbcURI

構成プロパティの設定について詳しく学ぶには、各プロパティの Marketing Platform オンライン・ヘルプを参照してください。これらの構成プロパティおよび eMessage の構成についての追加情報は、「IBM eMessage 起動および管理者ガイド」を参照してください。

eMessage システム・テーブルの作成とデータの設定を手動で行う

eMessage の場合、Campaign スキーマに追加のシステム・テーブルを作成し、これらのテーブルに初期データを設定する必要があります。システム・テーブルを自動的に作成するオプションを選択すると、Campaign インストーラーは、Campaign スキーマで eMessage システム・テーブルを自動的に作成し、データを追加します。ただし、オプションを選択しない場合は、eMessage システム・テーブルを手動で作成してデータを追加する必要があります。

データベース・クライアントを使用して、Campaign データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

eMessage テーブルを作成するスクリプト

IBM では、ローカル環境に eMessage テーブルを作成する `ace_op_systab` スクリプトを提供しています。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されている場合は、eMessage インストール済み環境の `ddl/unicode` ディレクトリーにある適切なスクリプトを見つけます。

Campaign システム・テーブルが Unicode を使用するように構成されていない場合は、eMessage インストール済み環境の `ddl` ディレクトリーにある非 Unicode 用のスクリプトを使用します。使用する必要のあるスクリプトを調べるには、次の表をご利用ください。

表 19. eMessage テーブルを作成するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	<code>ace_op_systab_db2.sql</code> システム・テーブルが置かれるユーザー・テーブル・スペースおよびシステム一時テーブル・スペースには、それぞれ 16K 以上のページ・サイズが必要です。
Microsoft SQL Server	<code>ace_op_systab_sqlsvr.sql</code>
Oracle	<code>ace_op_systab_ora.sql</code>

eMessage テーブルにデータを追加するスクリプト

IBM では、ローカル環境で eMessage テーブルにデータを追加する `ace_op_populate_systab` スクリプトを提供しています。

データ追加用スクリプトは、eMessage インストール済み環境の `ddl` ディレクトリーに格納されています。IBM で用意しているデータ追加用スクリプトのバージョンは 1 つだけです。これらのスクリプトは、Unicode テーブルまたは非 Unicode テーブルのいずれにも使用できます。

注: eMessage インストール・ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内のサブフォルダーです。

使用する必要のあるスクリプトを調べるには、次の表をご利用ください。

表 20. eMessage テーブルにデータを追加するスクリプト

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	ace_op_populate_systab_db2.sql
Microsoft SQL Server	ace_op_populate_systab_sqlsvr.sql
Oracle	ace_op_populate_systab_ora.sql

IBM EMM Hosted Services にアクセスするシステム・ユーザーの構成

eMessage コンポーネントは、ログイン資格情報の手動入力を必要とせずに、IBM EMM Hosted Services にアクセスできなければなりません。自動ログインを確立するには、Marketing Platform に、必要なアクセス資格情報を提供できるシステム・ユーザーを定義します。

ユーザー管理およびトラブルシューティングを単純にするために、既存のシステム・ユーザーがホスト・サービスおよびローカル・システム・テーブルにアクセスするように変更することができます。複数のシステムに資格情報を提供する単一のシステム・ユーザーを構成できます。例えば、Campaign システム・ユーザーの構成を変更することで、IBM EMM Hosted Services および Campaign スキーマの eMessage システム・テーブルに自動的にアクセスできる単一のユーザーを作成します。

IBM EMM Hosted Services にアクセスするために必要な資格情報は、ご使用のホストされたメッセージング・アカウント用に IBM から提供されるユーザー名とパスワードです。使用する資格情報は、IBM の米国のデータ・センターに接続するか、IBM が英国で保守しているデータ・センターに接続するかによって異なります。どちらのデータ・センターを使用するかを決定するには、IBM にご相談ください。

IBM EMM Hosted Services と通信するシステム・ユーザーの構成方法に関する具体的な情報については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

システム・ユーザーおよびデータ・ソースの作成方法に関する一般情報については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

IBM EMM Hosted Services へのパーティション・アクセスを構成する

パーティション内の IBM eMessage コンポーネントは、IBM EMM Hosted Services との通信を試みる際に、有効なログイン資格情報を自動的に提供できるようになっていなければなりません。そのためには、Marketing Platform ユーザーに IBM EMM Hosted Services ログイン資格情報を追加する必要があります。このユーザーは、eMessage システム・ユーザーになります。

IBM EMM Hosted Services 資格情報を格納するプラットフォーム・データ・ソースを、eMessage システム・ユーザーに追加できます。このユーザーは、パーティション内の Campaign システム・テーブルにアクセスするシステム・ユーザーと同じであっても構いません。

パーティションのシステム・ユーザーを構成するためのステップは、eMessage の初期インストール時に、最初のパーティションを作成するために従ったステップと同じです。IBM EMM Hosted Services ログイン資格情報をシステム・ユーザーに追加する方法については、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

IBM EMM Hosted Services にアクセスするために必要な資格情報は、最初の起動プロセスで IBM から提供されるユーザー名とパスワードです。

重要: 追加するパーティションごとに、個別のユーザー名およびパスワードを IBM に要求する必要があります。

新規パーティションに対応する Campaign で eMessage を使用可能にする

新規 eMessage パーティションのユーザーが Campaign にある eMessage の機能にアクセスできるようにするには、Campaign パーティションで eMessage を使用可能にするため、対応する Campaign パーティションの eMessageInstalled 構成プロパティを更新する必要があります。

例えば、eMessage メール配信タブは、Campaign 構成で eMessage を使用可能にするまでは、Campaign インターフェースに表示されません。

パーティションで eMessage を使用可能にするには、Campaign パーティションに対応する eMessageInstalled 構成プロパティを更新します。

Marketing Platform 構成で、「**Campaign | partitions | partition[n] | server | internal**」にナビゲートして、eMessageInstalled プロパティを **yes** に設定します。

eMessage の受信者リスト・アップローダーの場所の指定

eMessage を使用可能にするパーティションごとに、受信者リスト・アップローダー (RLU) の場所を指定します。RLU は、出力リスト・テーブルのデータおよび関連するメタデータを、IBM によってホストされるリモート・サービスにアップロードします。

初期インストール時に、IBM インストーラーは自動的に RLU の場所をデフォルト・パーティション (partition1) の構成に追加します。ただし、新しいパーティションを環境に追加するときには、新しいパーティションのすべてが正しい場所を参照するように手動で構成する必要があります。eMessage のインストールごとに RLU は 1 つしか存在しないので、すべてのパーティションは、Campaign Web アプリケーションをホストするマシンのローカル・ファイル・システムに置かれた同じプラグイン・ファイルにアクセスします。

1. Campaign インストール済み環境の **partition1** の構成で、
「Campaign」 > 「partitions」 > 「partition1」 > 「eMessage」 >
「eMessagePluginJarFile」 にナビゲートします。

このプロパティの値は、RLU として機能するプラグイン・ファイル (emessageplugin.jar) の絶対パスです。

例: C:\IBM\Unica\emessage\plugin\emessageplugin.jar

2. eMessagePluginJarFile プロパティの値をコピーします。
3. 新しいパーティションの eMessagePluginJarFile にナビゲートし、**partition1** からコピーしたパスを入力します。

すべてのパーティションは、RLU に対して同じ場所を使用する必要があります。

eMessage を構成した後のシステム・コンポーネントの再始動

eMessage および Campaign の構成を変更したら、Campaign Web アプリケーション・サーバー、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT)、および Campaign リスナーを再始動する必要があります。

1. Campaign の Web アプリケーション・サーバーを再始動します。

手順については、ご使用の Web アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

サーバーが始動したことを検査するには、IBM EMM インストール済み環境にログインし、Campaign にアクセスして、既存のメールを開けることを確認します。

2. レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を再始動します。

RCT を手動で再始動するには、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにある rct スクリプトを実行します (rct start コマンド)。

RCT がサービスとして実行されるように構成されている場合は、RCT サービスを再始動します。RCT をサービスとして初めて再始動するときは、後で RCT を手動で再始動する必要があります。

詳しくは、90 ページの『eMessage レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) スクリプト』を参照してください。

3. Campaign リスナーを次のようにして再始動します。
 - Windows の場合は、Campaign インストール済み環境の bin ディレクトリーにある cmpServer.bat ファイルを実行します。
 - UNIX の場合は、./rc.unica_ac start コマンドを root として実行します。

eMessage パーティションの構成および接続をテストする

eMessage が提供しているスクリプトを使用して、パーティションの構成および IBM EMM Hosted Services への接続を検証します。さらに、パーティションからメーリング・インターフェースにアクセスすることも確認する必要があります。

重要: Campaign または eMessage の構成を変更した場合は、作業を開始する前に、Campaign をホストする Web アプリケーション・サーバーを再始動したことと、レスポンスおよびコンタクトのトラッカーを再始動したことを確認してください。

パーティションのテスト方法について詳しくは、「*IBM eMessage 起動および管理者ガイド*」を参照してください。

第 10 章 IBM Marketing Platform ユーティリティーおよび SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティーの概要を説明します。この説明には、ユーティリティーのすべてに適用される詳細が含まれます。これらの詳細は、個々のユーティリティーの説明には記載しません。

ユーティリティーの場所

Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

ユーティリティーのリストおよび説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティーを提供します。

- 75 ページの『alertConfigTool』 - IBM EMM 製品のアラートおよび構成を登録します。
- 75 ページの『configTool』 - 製品の登録を含め、構成設定をインポート、エクスポート、および削除します。
- 80 ページの『datafilteringScriptTool』 - データ・フィルターを作成します。
- 81 ページの『encryptPasswords』 - パスワードを暗号化して保管します。
- 83 ページの『partitionTool』 - パーティションのデータベース・エントリーを作成します。
- 85 ページの『populateDb』 - Marketing Platform データベースにデータを追加します。
- 86 ページの『restoreAccess』 - platformAdminRole 役割を持つユーザーを復元します。
- 88 ページの『scheduler_console_client』 - トリガーを listen するように構成されている IBM EMM スケジューラー・ジョブをリストし、開始します。

Marketing Platform ユーティリティーを実行するための前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティーの実行に関する前提条件です。

- すべてのユーティリティーは、そのユーティリティーが置かれているディレクトリー (デフォルトでは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリー) から実行します。
- UNIX でのベスト・プラクティスは、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを実行するユーザー・アカウントと同じユーザー・アカウントでユーティリティーを実行することです。別のユーザー・アカウントでユーティリティーを実行する場合は、`platform.log` ファイルに設定されたアクセス許可を調整して、そのユーザー・アカウントがこのファイルに書き込めるようにします。アクセス許可を調整しなければ、ユーティリティーがログ・ファイルに書

き込むことができないため、エラー・メッセージが表示される場合があります。ただし、その場合でもツールは正常に機能します。

接続問題のトラブルシューティング

encryptPasswords を除くすべての Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルと対話します。システム・テーブル・データベースに接続するために、これらのユーティリティーは以下の接続情報を使用します。これらの情報は、インストーラーが Marketing Platform のインストール時に提供された情報を使用して設定します。上記の情報は、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある、jdbc.properties ファイルに保管されています。

- JDBC ドライバー名
- JDBC 接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名が組み込まれます。)
- データ・ソース・ログイン
- データ・ソース・パスワード (暗号化済み)

さらに、これらのユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプト、またはコマンド・ラインのいずれかで設定される、JAVA_HOME 環境変数に依存します。Marketing Platform インストーラーは、この変数を setenv スクリプトに自動的に設定しているはずですが、ユーティリティーの実行に問題がある場合には、JAVA_HOME 変数が設定されていることを確認することをお勧めします。JDK は Sun バージョンでなければなりません (例えば、WebLogic で使用可能な JRockit JDK であってはなりません)。

特殊文字

オペレーティング・システムで予約文字として指定されている文字は、エスケープする必要があります。予約文字のリストおよびエスケープする方法については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーでの標準オプション

以下のオプションは、すべての Marketing Platform ユーティリティーで選択可能です。

-l logLevel

コンソールに表示されるログ情報のレベルを設定します。オプションは、high、medium、および low です。デフォルトは low です。

-L

コンソール・メッセージのロケールを設定します。デフォルト・ロケールは en_US です。選択可能なオプションの値は、Marketing Platform が翻訳されている言語によって決まります。ロケールを指定するには、ISO 639-1 および ISO 3166 に従った ICU ロケール ID を使用します。

-h

コンソールに使用法に関する簡単なメッセージを表示します。

-m

コンソールに、このユーティリティのマニュアル・ページを表示します。

-v

コンソールに、実行の詳細を表示します。

Marketing Platform ユーティリティ

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティに関する機能詳細、構文、例について説明します。

alertConfigTool

通知タイプは各種 IBM EMM 製品に固有です。 alertConfigTool ユーティリティを使用して通知タイプを登録します。インストールまたはアップグレード時にインストーラーが通知タイプの登録を自動的に行わなかった場合に使用します。

構文

```
alertConfigTool -i -f importFile
```

コマンド

-i -f importFile

指定された XML ファイルからアラートと通知のタイプをインポートします。

例

- Marketing Platform インストール済み環境の tools\bin ディレクトリーにある Platform_alerts_configuration.xml という名前のファイルから、アラートと通知のタイプをインポートします。

```
alertConfigTool -i -f Platform_alerts_configuration.xml
```

configTool

「構成」ページのプロパティと値は、システム・テーブルに格納されます。 configTool ユーティリティを使用して、構成設定をシステム・テーブルにインポートしたり、システム・テーブルからエクスポートしたりできます。

configTool をいつ使用するか

以下の理由で configTool を使用することがあります。

- Campaign と共に提供されるパーティションおよびデータ・ソース・テンプレートをインポートする場合。その後、それを「構成」ページで変更したり複製したりできます。
- 製品インストーラーが自動的にプロパティをデータベースに追加できない場合に、IBM EMM 製品を登録 (構成プロパティをインポート) する。
- バックアップ用、または IBM EMM の他のインストール済み環境へのインポート用に、XML バージョンの構成設定をエクスポートする。

- 「**カテゴリの削除**」リンクがないカテゴリを削除する。これを行うには、configTool を使用して構成をエクスポートしてから、カテゴリを作成する XML を手動で削除し、configTool を使用して編集済み XML をインポートします。

重要: このユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの usm_configuration テーブルと usm_configuration_values テーブルを変更します。これらのテーブルには、構成プロパティとそれらの値が入っています。最適な結果を得るには、これらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、configTool を使って既存の構成をエクスポートした結果のファイルをバックアップしてください。こうすると、configTool を使ってインポートするときにエラーが発生した場合でも、構成を復元することが可能です。

構文

```
configTool -d -p "elementPath" [-o]
```

```
configTool -i -p "parent ElementPath" -f importFile [-o]
```

```
configTool -x -p "elementPath" -f exportFile
```

```
configTool -vp -p "elementPath" -f importFile [-d]
```

```
configTool -r productName -f registrationFile [-o] configTool -u  
productName
```

コマンド

-d -p "elementPath" [o]

構成プロパティ階層内のパスを指定して、構成プロパティとそれらの設定を削除します。

エレメント・パスには、カテゴリおよびプロパティの内部名が使用されている必要があります。それらを得るには、「構成」ページの目的のカテゴリまたはプロパティを選択して、右のペインにある括弧内に示されているパスを確認します。| 文字を使用して構成プロパティの階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドで削除できるのは、アプリケーション内のカテゴリおよびプロパティのみで、アプリケーション全体は削除できません。アプリケーション全体の登録を抹消するには、-u コマンドを使用してください。
- 「構成」ページで「**カテゴリの削除**」リンクがないカテゴリを削除するには、-o オプションを使用してください。

-d を指定した -vp コマンドを使用する場合、configTool はユーザーが指定するパスにあるすべての下位ノードを削除します (これらのノードが、ユーザーの指定する XML ファイルに含まれていない場合)。

-i -p "parentElementPath" -f importFile [o]

指定された XML ファイルから、構成プロパティとそれらの設定をインポートします。

インポートするには、親要素へのパスを指定します。この親要素の下に、カテゴリがインポートされます。configTool ユーティリティーは、パスに指定されたカテゴリの下にプロパティをインポートします。

最上位より下のいずれのレベルでもカテゴリを追加できますが、最上位カテゴリと同じレベルではカテゴリを追加できません。

親エレメント・パスには、カテゴリおよびプロパティの内部名が使用されている必要があります。これらの内部名は、「構成」ページに移動して、必要なカテゴリまたはプロパティを選択し、右側のペインの括弧内に表示されるパスを調べることによって得ることができます。| 文字を使用して構成プロパティの階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

tools/bin ディレクトリーからのインポート・ファイルの相対位置を指定できます。あるいは、ディレクトリーの絶対パスを指定できます。相対パスを指定するか、またはパスを指定しない場合、configTool はまず、tools/bin ディレクトリーからの相対位置にあるファイルを探します。

デフォルトではこのコマンドで既存のカテゴリは上書きされませんが、-o オプションを使用して強制的に上書きすることができます。

-x -p "elementPath" -f exportFile

指定された名前の XML ファイルに、構成プロパティとそれらの設定をエクスポートします。

すべての構成プロパティをエクスポートできます。あるいは、構成プロパティ階層内のパスを指定することで、特定のカテゴリに限定してエクスポートすることもできます。

要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらを取得するには、「構成」ページに移動し、対象のカテゴリまたはプロパティを選択し、右ペインで括弧内に表示されているパスを確認します。| 文字を使用して構成プロパティの階層のパスを区切り、パスを二重引用符で囲みます。

現行ディレクトリーからのエクスポート・ファイルの相対位置を指定できます。あるいは、ディレクトリーの絶対パスを指定できます。ファイル指定に区切り文字 (UNIX では / Windows では \ または ¥) が含まれない場合、configTool は Marketing Platform インストール済み環境下の tools/bin ディレクトリーにファイルを書き込みます。xml 拡張子を付けなかった場合、configTool がそれを付加します。

-vp -p "elementPath" -f importFile [-d]

このコマンドは、主に手動アップグレードにおける構成プロパティのインポートに使用されます。新しい構成プロパティが含まれるフィックスパックを適用し、その後にアップグレードする場合、手動アップグレード・プロセスの一部として構成ファイルをインポートすると、フィックスパックを適用したときに設定された値

がオーバーライドされる場合があります。-vp コマンドを使用すると、インポートを行っても、それ以前に設定された構成値はオーバーライドされません。

重要: configTool ユーティリティーを -vp オプションを指定して使用したら、変更が適用されるように、Marketing Platform がデプロイされている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-d を指定した -vp コマンドを使用する場合、configTool はユーザーが指定するパスにあるすべての下位ノードを削除します (これらのノードが、ユーザーの指定する XML ファイルに含まれていない場合)。

-r productName -f registrationFile

アプリケーションを登録します。登録ファイルのロケーションは、tools/bin ディレクトリーからの相対パスで指定することも、絶対パスで指定することもできます。デフォルトではこのコマンドで既存の構成は上書きされませんが、-o オプションを使用して強制的に上書きすることができます。productName パラメーターは、上記にリストされているうちのいずれかでなければなりません。

次のことに注意してください。

- -r コマンドを使用する場合、登録ファイルには XML 内の 1 番目のタグとして <application> が含まれていなければなりません。

Marketing Platform データベースに構成プロパティーを挿入するために使用できる他のファイルが、製品と一緒に提供されることがあります。それらのファイルについては、-i コマンドを使用します。<application> タグが 1 番目のタグとして含まれるファイルのみ、-r コマンドと共に使用できます。

- Marketing Platform の登録ファイルは Manager_config.xml という名前で、1 番目のタグは <Suite> です。新規インストールでこのファイルを登録するには、「IBM Marketing Platform インストール・ガイド」に説明されているように populateDb ユーティリティーを使用するか、または Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 初回インストールの後、Marketing Platform 以外の製品を再登録するには、configTool を -r コマンドおよび -o と共に使用して、既存のプロパティーを上書きします。

configTool ユーティリティーは、製品の登録または登録解除を行うコマンドのパラメーターとして製品名を使用します。IBM EMM の 8.5.0 リリースでは、多くの製品名が変更されています。しかし、configTool で認識される名前は変更されませんでした。configTool で使用するための有効な製品名を、現在の製品名と共に以下にリストします。

表 21. configTool 登録および登録解除で使用する製品名

製品名	configTool で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact

表 21. configTool 登録および登録解除で使用する製品名 (続き)

製品名	configTool で使用する名前
Contact Optimization	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight
Digital Analytics for On Premises	NetInsight
Opportunity Detection	Detect
Leads	Leads
Interaction History	InteractionHistory
Attribution Modeler	AttributionModeler
IBM SPSS Modeler Advantage Enterprise Marketing Management Edition	SPSS
Digital Analytics	Coremetrics

-u *productName*

productName によって指定されたアプリケーションの登録を抹消します。製品カテゴリーにパスを含める必要はありません。製品名は必須で、そのみで十分です。この処理は、製品のすべてのプロパティおよび構成設定を削除します。

オプション

-o

-i または -r と共に使用すると、既存のカテゴリーまたは製品登録 (ノード) を上書きします。

-d と共に使用すると、「構成」ページに「**カテゴリーの削除**」リンクがないカテゴリー (ノード) を削除することができます。

例

- Marketing Platform インストール済み環境の下の conf ディレクトリーの Product_config.xml という名前のファイルから構成設定をインポートします。

```
configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
```

- 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートの 1 つを、デフォルトの Campaign パーティションである partition1 にインポートします。この例では、Oracle データ・ソース・テンプレートである OracleTemplate.xml が、Marketing Platform インストール済み環境下の tools/bin ディレクトリーに置かれているとします。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f OracleTemplate.xml
```

- すべての構成設定を D:¥backups ディレクトリーの myConfig.xml という名前のファイルにエクスポートします。

```
configTool -x -f D:¥backups¥myConfig.xml
```

- 既存の Campaign パーティション (データ・ソース・エントリーを伴う) をエクスポートし、partitionTemplate.xml という名前のファイルに保存し、Marketing Platform インストール済み環境下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーに保管します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f
partitionTemplate.xml
```

- Marketing Platform インストール済み環境の下のデフォルトの tools/bin ディレクトリーにある app_config.xml という名前のファイルを使用して、productName という名前のアプリケーションを手動で登録して、このアプリケーションの既存の登録を上書きするように強制します。

```
configTool -r product Name -f app_config.xml -o
```

- productName という名前のアプリケーションを登録解除します。

```
configTool -u productName
```

datafilteringScriptTool

datafilteringScriptTool ユーティリティーは、XML ファイルを読み取って、Marketing Platform システム・テーブル・データベース内のデータ・フィルター・テーブルにデータを追加します。

XML をどのように作成するかによって、このユーティリティーは 2 つの方法で使用できます。

- XML 要素の 1 つのセットを使用して、フィールド値の固有の組み合わせを基に、データ・フィルターを自動生成できます (固有の組み合わせごとに、1 つのデータ・フィルター)。
- XML 要素のわずかに異なるセットを使用して、ユーティリティーが作成する各データ・フィルターを指定できます。

XML の作成について詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

どのような場合に datafilteringScriptTool を使用するか

新しいデータ・フィルターを作成するときには、datafilteringScriptTool を使用する必要があります。

前提条件

Marketing Platform が配置され、実行されている必要があります。

SSL での datafilteringScriptTool の使用

Marketing Platform が片方向 SSL を使用して配置されている場合は、datafilteringScriptTool スクリプトを変更して、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加する必要があります。スクリプトを変更するには、以下の情報が必要です。

- トラストストア・ファイル名およびパス
- トラストストアのパスワード

テキスト・エディターで、datafilteringScriptTool スクリプト (.bat または .sh) を開き、以下のような行を見つけます (Windows バージョンの例です)。

```
:callexec
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

これらの行を、以下のように編集します (新しいテキストは太字になっています)。myTrustStore.jks および myPassword を、ご使用のトラストストアのパスとファイル名およびトラストストアのパスワードで置き換えます。

```
:callexec
```

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStore="C:\security\myTrustStore.jks"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"  
%SSL_OPTIONS%
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

構文

```
datafilteringScriptTool -r pathfile
```

コマンド

```
-r path_file
```

指定された XML ファイルからデータ・フィルター仕様をインポートします。ファイルがインストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにない場合、*path_file* パラメーターにパスを指定して二重引用符で囲みます。

例

- C:\unica\xml ディレクトリーにある collaborateDataFilters.xml という名前のファイルを使用して、データ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

```
datafilteringScriptTool -r "C:\unica\xml\collaborateDataFilters.xml"
```

encryptPasswords

encryptPasswords ユーティリティーは、Marketing Platform が内部的に使用する 2 つのパスワードのいずれかを暗号化して保管するために使用します。

ユーティリティーは、以下の 2 つのパスワードを暗号化できます。

- Marketing Platform がそのシステム・テーブルにアクセスするために使用するパスワード。ユーティリティーは、既存の暗号化されたパスワード (Marketing

Platform インストール済み環境の `tools\bin` ディレクトリーにある、`jdbc.properties` ファイルに保管されています) を新しいパスワードで置き換えます。

- Marketing Platform が、Marketing Platform または Web アプリケーション・サーバーに付属のデフォルトの証明書以外の証明書を使って SSL を使用するよう構成されている場合に使用する鍵ストア・パスワード。この証明書は、自己署名証明書または認証局からの証明書のいずれかです。

どのような場合に `encryptPasswords` を使用するか

`encryptPasswords` は、次のような目的で使用します。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベースにアクセスするために使用するアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成したか、認証局から証明書を入手した場合。

前提条件

- `encryptPasswords` を実行する前に、新しいデータベース・パスワードを暗号化および保管して、`jdbc.properties` ファイルのバックアップ・コピーを作成します。このファイルは、Marketing Platform インストール済み環境の `tools/bin` ディレクトリーにあります。
- `encryptPasswords` を実行して鍵ストアのパスワードを暗号化し、保管するには、デジタル証明書を作成または入手して、鍵ストアのパスワードを知っておかなければなりません。

構文

```
encryptPasswords -d databasePassword
```

```
encryptPasswords -k keystorePassword
```

コマンド

`-d databasePassword`

データベース・パスワードを暗号化します。

`-k keystorePassword`

鍵ストア・パスワードを暗号化して、`pfile` という名前のファイルに保管します。

例

- Marketing Platform のインストール時に、システム・テーブル・データベース・アカウントのログインは、`myLogin` に設定されていました。インストールしてからしばらく経った今、このアカウントのパスワードを `newPassword` に変更しました。以下のように `encryptPasswords` を実行して、データベース・パスワードを暗号化して保管します。

```
encryptPasswords -d newPassword
```


- SSL を使用するように IBM EMM アプリケーションを構成しています。デジタル証明書は、既に作成または入手しました。以下のように `encryptPasswords` を実行して、鍵ストア・パスワードを暗号化して保管します。

```
encryptPasswords -k myPassword
```

partitionTool

パーティションには、Campaign のポリシーおよび役割が関連付けられます。これらのポリシーと役割、およびそれぞれのパーティションとの関連付けは、Marketing Platform システム・テーブルに保管されます。partitionTool ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルにパーティションに関する基本ポリシーおよび役割情報のシードを行います。

どのような場合に partitionTool を使用するか

作成するパーティションごとに、partitionTool を使用して、Marketing Platform システム・テーブルへの基本ポリシーおよび役割情報のシードを行います。

Campaign に複数のパーティションをセットアップする方法について詳しくは、お使いのバージョンの Campaign のインストール・ガイドを参照してください。

特殊文字とスペース

スペースが含まれるパーティションの説明またはユーザー、グループ、あるいはパーティションの名前は、二重引用符で囲む必要があります。

構文

```
partitionTool -c -s sourcePartition -n newPartitionName [-u  
admin_user_name] [-d partitionDescription] [-g groupName]
```

コマンド

partitionTool ユーティリティーでは、以下のコマンドを使用できます。

-c

-s オプションを使用して指定された既存のパーティションのポリシーおよび役割を複製し、**-n** オプションを使用して指定された名前を付けます。c では、これらのオプションの両方が必須です。このコマンドは以下の操作を行います。

- Campaign の管理役割ポリシーとグローバル・ポリシーの両方で、管理役割を持つ新規 IBM EMM ユーザーを作成します。指定するパーティション名が、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。
- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新しい管理ユーザーをそのグループのメンバーにします。
- 新規パーティション・オブジェクトを作成します。
- ソース・パーティションに関連付けられたすべてのポリシーを複製し、これらのポリシーを新しいパーティションに関連付けます。
- 複製されたポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられたすべての役割を複製します。

- 複製された役割ごとに、ソース役割でマップされていたように、すべての機能をマップします。
- 新規 Marketing Platform グループを、役割の複製中に作成されたシステム定義の最新の管理役割に割り当てます。デフォルトのパーティションである `partition1` を複製する場合、この役割はデフォルト管理役割 (Admin) となります。

オプション

-d *partitionDescription*

オプション。-c との組み合わせでのみ使用します。-list コマンドの出力に表示する説明を指定します。256 文字以内でなければなりません。説明にスペースが含まれる場合は、二重引用符で囲みます。

-g *groupName*

オプション。-c との組み合わせでのみ使用します。ユーティリティーが作成する Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で一意でなければなりません。

名前が定義されない場合のデフォルトは、`partition_nameAdminGroup` です。

-n *partitionName*

-list ではオプション、-c では必須です。32 文字以内でなければなりません。

-list で使用する場合、情報をリストするパーティションを指定します。

-c で使用する場合、新規パーティションの名前を指定します。指定するパーティション名は、管理ユーザーのパスワードとして使用されます。パーティション名は、そのパーティションを (「構成」 ページでパーティション・テンプレートを使用して) 構成したときにパーティションに指定した名前と一致する必要があります。

-s *sourcePartition*

必須。-c との組み合わせでのみ使用します。複製するソース・パーティションの名前です。

-u *adminUserName*

オプション。-c との組み合わせでのみ使用します。複製されたパーティションの管理ユーザーのユーザー名を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で一意でなければなりません。

名前が定義されない場合のデフォルトは、`partitionNameAdminUser` です。

パーティション名が、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。

例

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
 - `partition1` から複製する。
 - パーティション名を `myPartition` にする。

- デフォルトのユーザー名 (myPartitionAdminUser) およびパスワード (myPartition) を使用する。
- デフォルトのグループ名 (myPartitionAdminGroup) を使用する。
- 説明を「ClonedFromPartition1」にする。

```
partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"
```

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。
 - partition1 から複製する。
 - パーティション名を partition2 にする。
 - ユーザー名を customerA に指定し、partition2 のパスワードを自動的に割り当てる。
 - グループ名を customerAGroup に指定する。
 - 説明を「PartitionForCustomerAGroup」にする。

```
partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"
```

populateDb

populateDb ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト (シード) ・データを挿入します。

IBM EMM インストーラーは、Marketing Platform システム・テーブルに Marketing Platform および Campaign のデフォルト・データを追加できます。ただし、企業ポリシーがインストーラーによるデータベースの変更を許可しない場合、またはインストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できない場合は、このユーティリティーを使用して、Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト・データを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータには、デフォルト・パーティションのセキュリティの役割および権限が含まれます。Marketing Platform の場合、このデータには、デフォルトのユーザーとグループ、およびデフォルト・パーティションのセキュリティの役割および権限が含まれます。

構文

```
populateDb -n productName
```

コマンド

```
-n productName
```

デフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。有効な製品名は、Manager (Marketing Platform の場合) および Campaign (Campaign の場合) です。

例

•

Marketing Platform のデフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Manager
```

•

Campaign のデフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Campaign
```

restoreAccess

PlatformAdminRole 特権を持つすべてのユーザーが誤ってロックアウトされた場合、または Marketing Platform にログインするすべての機能が失われた場合には、restoreAccess ユーティリティを使用して、Marketing Platform へのアクセスを復元できます。

どのような場合に restoreAccess を使用するか

このセクションで説明する 2 つの状況では、restoreAccess を使用することをお勧めします。

PlatformAdminRole ユーザーが無効になった場合

Marketing Platform で PlatformAdminRole 特権を持つすべてのユーザーが、システム内で無効にされる可能性があります。platform_admin ユーザー・アカウントが無効にされる場合の一例を説明します。例えば、PlatformAdminRole 特権を持つユーザー (platform_admin ユーザー) が 1 人しかないとします。「構成」ページで、「全般」パスワード設定」カテゴリの「許可されるログイン再試行の最大回数」プロパティが 3 に設定されているとします。この場合に、誰かが platform_admin としてログインを試み、不正なパスワードを 3 回連続して入力したとします。これらのログイン試行の失敗により、platform_admin アカウントはシステム内で無効にされます。

この場合、restoreAccess を使用することで、Web インターフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを Marketing Platform システム・ユーザーに追加できます。

このようにして restoreAccess を実行すると、ユーティリティは、指定されたログイン名とパスワード、および PlatformAdminRole 特権を設定したユーザーを作成します。

指定したユーザー・ログイン名が、Marketing Platform 内に内部ユーザーとして存在する場合、そのユーザーのパスワードは変更されます。

ログイン名が PlatformAdmin で、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーのみが、例外なくすべてのダッシュボードを管理できます。したがって、platform_admin ユーザーが無効にされて、restoreAccess を使用してユーザーを作成する場合は、platform_admin のログインを設定したユーザーを作成する必要があります。

Active Directory の統合が不適切に構成されている場合

不適切な構成で Windows Active Directory 統合を実装したことにより、ログインできなくなった場合には、restoreAccess を使用して、ログイン機能を復元します。

このようにして `restoreAccess` を実行すると、ユーティリティーは「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を「Windows 統合ログイン」から Marketing Platform に変更します。この変更により、ロックアウトされる前に存在していた任意のユーザー・アカウントを使用してログインできるようになります。オプションで、新規ログイン名およびパスワードを指定することもできます。このように `restoreAccess` ユーティリティーを使用する場合は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

パスワードに関する考慮事項

`restoreAccess` を使用するときには、パスワードに関して次のことに注意してください。

- `restoreAccess` ユーティリティーは、ブランク・パスワードをサポートしません。また、パスワード規則を強要しません。
- 使用中のユーザー名を指定すると、ユーティリティーはそのユーザーのパスワードをリセットします。

構文

```
restoreAccess -u loginName -p password
```

```
restoreAccess -r
```

コマンド

-r

-u *loginName* オプションを指定せずに使用した場合は、「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を Marketing Platform にリセットします。変更を適用するには、Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-u *loginName* オプションを指定して使用する場合、PlatformAdminRole ユーザーを作成します。

オプション

-u *loginName*

PlatformAdminRole 特権および指定したログイン名を持つユーザーを作成します。-p オプションと一緒に使用する必要があります。

-p *password*

作成するユーザーのパスワードを指定します。-u に必要です。

例

- PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを作成します。ログイン名は `tempUser` で、パスワードは `tempPassword` です。

```
restoreAccess -u tempUser -p tempPassword
```

- ログイン方法の値を IBM Marketing Platform に変更し、PlatformAdminRole 特権を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword
```

scheduler_console_client

IBM EMM スケジューラーに構成されているジョブがトリガーを listen するようにセットアップされている場合は、このユーティリティーによって、それらのジョブをリストし、開始できます。

SSL が使用可能にされている場合の作業

Marketing Platform Web アプリケーションが SSL を使用するように構成されている場合、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JVM は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーで使用されている SSL 証明書と同じ証明書を使用する必要があります。

SSL 証明書をインポートするには、以下の手順に従います。

- scheduler_console_client によって使用される JRE の場所を特定します。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されている場合、この環境変数が指す JRE が、scheduler_console_client ユーティリティーによって使用されるものです。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されていない場合、scheduler_console_client ユーティリティーは、Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプト、またはコマンド・ラインのいずれかで設定された JRE を使用します。
- Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書を、scheduler_console_client が使用する JRE にインポートします。

Sun JDK には、証明書をインポートするために使用できる、keytool という名前のプログラムが組み込まれています。このプログラムの用法について詳しくは、Java の資料を参照するか、プログラムを実行する際に -help を入力してヘルプにアクセスしてください。

- テキスト・エディターで tools/bin/schedulerconsoleclient ファイルを開き、以下のプロパティーを追加します。これらのプロパティーは、Marketing Platform がどの Web アプリケーション・サーバーに配置されているかに応じて異なります。
 - WebSphere の場合は、以下のプロパティーをファイルに追加します。

```
-Djavax.net.ssl.keyStoreType=JKS
```

```
-Djavax.net.ssl.keyStore="鍵ストア JKS ファイルへのパス"
```

```
-Djavax.net.ssl.keyStorePassword="鍵ストアのパスワード"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア JKS ファイルへのパス"
```

- Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストアのパスワード"
- DisUseIBMSSSLSocketFactory=false
- WebLogic の場合は、以下のプロパティをファイルに追加します。
- Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
- Djavax.net.ssl.trustStore="トラストストア JKS ファイルへのパス"
- Djavax.net.ssl.trustStorePassword="トラストストアのパスワード"

証明書が一致しないと、Marketing Platform ログ・ファイルに以下のようなエラーが記録されます。

原因: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: 要求されたターゲットへの有効な証明書パスが見つかりません (Caused by: sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: unable to find valid certification path to requested target)

前提条件

Marketing Platform がインストールされ、配置され、実行されている必要があります。

構文

```
scheduler_console_client -v -t trigger_name user_name
```

```
scheduler_console_client -s -t trigger_name user_name
```

コマンド

-v

指定されたトリガーを listen するように構成されているスケジューラー・ジョブをリストします。

-t オプションと一緒に使用する必要があります。

-s

指定されたトリガーを送信します。

-t オプションと一緒に使用する必要があります。

オプション

-t *trigger_name*

スケジューラーに構成されている、トリガーの名前。

例

- trigger1 という名前のトリガーを listen するように構成されているジョブをリストします。


```
scheduler_console_client -v -t trigger1
```

- trigger1 という名前のトリガーを listen するように構成されているジョブを実行します。

```
scheduler_console_client -s -t trigger1
```

eMessage レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) スクリプト

レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) を実行し、その状況を確認するには、このスクリプトを使用します。

このスクリプトは、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにあります。eMessage ディレクトリーは、Campaign ディレクトリー内にあるサブディレクトリーです。

UNIX または Linux 環境では、このスクリプトを rct.sh として実行します。

Windows では、このスクリプトをコマンド・ラインから rct.bat として実行します。

構文

```
rct [ start | stop | check ]
```

コマンド

start

RCT を始動します。

stop

RCT を停止します。

オプション

check

RCT と IBM EMM Hosted Services との接続状況を確認します。

例

- Windows で RCT を始動するには、以下を実行します。

```
rct.bat start
```

- Windows で RCT を停止するには、以下を実行します。

```
rct.bat stop
```

- Linux 環境では、RCT が IBM EMM Hosted Services に接続されているかどうかを判別するには、以下を実行します。

```
rct.sh check
```

システムの状況に応じて、このコマンドの出力は以下のような内容になります。

```
C:\<EMM_HOME>\Campaign\eMessage\bin>rct check
Testing config and connectivity for partition partition1
Succeeded | Partition: partition1 - Hosted Services Account ID: asm_admin
```

eMessage MKService_rct スクリプト

MKService_rct スクリプトは、レスポンスおよびコンタクトのトラッカー (RCT) をサービスとして追加または削除します。RCT をサービスとして追加すると、RCT をインストールしたコンピューターが再始動するたびに、RCT が再始動します。サービスとしての RCT を削除すると、RCT は自動的に再始動されなくなります。

このスクリプトは、eMessage インストール済み環境の bin ディレクトリーにあります。

UNIX または Linux 環境では、root 権限またはデーモン・プロセスを作成する権限を持つユーザーとして MKService_rct.sh を実行します。

Windows では、このスクリプトをコマンド・ラインから MKService_rct.bat として実行します。

構文

```
MKService_rct -install
```

```
MKService_rct -remove
```

コマンド

-install

RCT をサービスとして追加します。

-remove

RCT サービスを削除します。

例

- RCT を Windows サービスとして追加する場合には、以下を実行します。

```
MKService_rct.bat -install
```

- UNIX または Linux で RCT サービスを削除するには、以下を実行します。

```
MKService_rct.sh -remove
```

第 11 章 Campaign のアンインストール

Campaign アンインストーラーを実行して、Campaign をアンインストールします。Campaign アンインストーラーを実行すると、インストール・プロセスの間に作成されたファイルが削除されます。例えば、構成ファイル、インストーラーの登録情報、およびユーザー・データなどのファイルがコンピューターから削除されます。

IBM EMM 製品をインストールすると、アンインストーラーが `Uninstall_Product` ディレクトリーに組み込まれます。ここで、`Product` は IBM 製品の名前です。Windows の場合、「コントロール パネル」の「プログラムの追加と削除」リストにも項目が追加されます。

アンインストーラーを実行するのではなくインストール・ディレクトリー内のファイルを手動で削除すると、同じ場所に IBM 製品を後ほど再インストールする場合にインストール結果が不完全なものになる可能性があります。製品アンインストールの後でも、データベースは削除されません。アンインストーラーは、インストール中に作成されたデフォルト・ファイルのみを削除します。インストール後に作成または生成されたどのファイルも削除されません。

注: UNIX の場合、Campaign をインストールしたのと同じユーザー・アカウントによってアンインストーラーを実行する必要があります。

Campaign をアンインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. Campaign Web アプリケーションを配置した場合、WebSphere または WebLogic から Web アプリケーションを配置解除します。
2. Campaign リスナーを停止します。
3. WebSphere または WebLogic をシャットダウンします。
4. Campaign に関連するプロセスを停止します。
5. 製品インストール・ディレクトリーに `ddl` ディレクトリーが既存である場合、その `ddl` ディレクトリーに用意されているスクリプトを実行して、システム・テーブル・データベースからテーブルを削除します。
6. 以下のいずれかのステップを実行して Campaign をアンインストールします。
 - `Uninstall_Product` ディレクトリー内にある Campaign アンインストーラーをダブルクリックします。アンインストーラーは、Campaign をインストールする際に使用したモードで実行します。
 - コンソール・モードを使用して Campaign をアンインストールする場合は、コマンド・ライン・ウィンドウで、アンインストーラーが存在するディレクトリーにナビゲートして、次のコマンドを実行します。

Uninstall_Product -i console

- サイレント・モードを使用して Campaign をアンインストールする場合は、コマンド・ライン・ウィンドウで、アンインストーラーが存在するディレクトリーにナビゲートして、次のコマンドを実行します。

Uninstall_Product -i silent

サイレント・モードを使用して Campaign をアンインストールする場合、アンインストール・プロセスでは、ユーザーとの対話用のダイアログが表示されません。

注: オプションを指定せずに Campaign をアンインストールすると、Campaign アンインストーラーは Campaign のインストール時に使用されたモードで実行されます。

IBM 技術サポートへの連絡

文書を参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM 技術サポートに電話することができます。このセクションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM 技術サポートのコンタクト情報

IBM 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM 製品技術サポートの Web サイト (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントでログインする必要があります。可能な場合、このアカウントは、IBM 顧客番号とリンクされている必要があります。アカウントを IBM 顧客番号に関連付ける方法については、Support Portal の「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的な事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件（例えば、プライバシー・ポリシー）への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、

および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan